

冬 雷

短歌雑誌

TOURAI



二〇二五年十月一日発行（毎月一回一日発行）
第六十四卷第十号（通巻七六四号）

10月号・2025年

第59回 創展 ご案内

小誌会員、嶋田正之氏の秋の大作が展示されます。お誘い合わせの上ご鑑賞下さい。

（嶋田氏は下段「●」印のところ、会場です。）

* 小誌来年度の表紙絵は、嶋田正之氏の作品を頂く予定であります。

〈編集部〉

ご招待

第59回 公募

創展

日本画・油彩画・水彩画・紙絵・鉛筆画
3Dシャドーボックスアート・その他

2025年9月27日(土)～10月5日(日)

会場：上野公園 東京都美術館
2階第2展示室
後援：東京都

9:30～17:00止め17:30までご覧になれます
9月27日は13:00～、10月5日は13:30止め

入場無料 Admission free
この日は会場にあります。

	9/27 (土)	9/28 (日)	9/29 (月)	9/30 (火)	10/1 (水)	10/2 (木)	10/3 (金)	10/4 (土)	10/5 (日)
9:30～13:30	●								
13:30～17:30			●		●		●		●

10月号 目次

冬雷集	1
作品一	20
十月集	36
残響集	40
作品二	48
作品三	58
八月号冬雷集評	桜井美保子 14
八月集 / 残響集評	鈴木やよい 15
大友柳太朗と美空ひばり⑤	大山敏夫 16
八月号作品一評	小林芳枝・藤田夏見 34
『比喩の短歌コレクション 1000』紹介	桜井美保子 42
八月号作品二評	井上菅子・江波戸愛子 44
七月号作品三評	山本三男・橘 美千代 46
玉城洋子歌集『炎昼』を読む	小林芳枝 55
交流他誌に学ぶ	〈編集室〉 56
八月号十首選（冬雷集・八月集 / 残響集）	58
八月号十首選（作品一・作品二・作品三）	60
歌集 / 歌書御礼	編集室・佐藤靖子 63

冬雷集

風薫る

大山敏夫 埼玉

国道を越えて直ぐなる道を進み線路を潜りぬけなほ直進す

ほぼ直ぐなる道をおほよそ真直ぐ行き突き当たる感じに広き遊水地
堤にて囲ふ遊水地青く広し湿地にくだり木の道歩む

この池にこんな大きな鯉のゐることの驚き少し喜び
青き葉の尖りて揃ふヨシの原風の薫りぬ雨の後の風

八月の半ばの蒸して青き葉も黝き葉も重く桜の揺らぎ

うすべにの合歓の花むら揺るした木漏れ日と薫る八月の風
ひとしきり雷雨の荒れて青空に白き雲の浮く暮るるまへの空

身まま気ままに過ごせる日々か小手先のショートメールだに寄越すことなく

赤間洋子 東京

久々のバス旅行なりメンバーは年寄りばかり二台連ねて

遠き山々入道雲を映したる松原湖は静かに我らを迎ふ

冬季には湖面が凍りスケートの練習場となるとの説明を聞く

湖の周囲廻れば芭蕉の句碑と北風小僧の寒太郎の碑あり

昼食は郷土料理の鱒飴鍋減塩してゐる我には塩辛し

売店で並びて買ひぬ土産物息子娘と我にもひとつ
 帰路のバストンネルに入りてノロノロと事故車避ければスムーズに行く
 ひとところ激しき雨が降りてきて一時間遅れて無事に帰りぬ

兼 目 久 栃木

太陽がちりぢり照る昼日中そそくさと吾が家に戻りたり
 35℃を越す日が続き日々暑し心身ともに暑さにへこたる

巨人大鵬卵焼きの時代に働きしどれをとつても勇気をもらふ
 育ちたるキウリ大きく育ちたり煮たるを食しやはらくうまし

トランプ氏が関税を発す日本政府が容認をせず首相反論す

朝起きてあまりの暑さに冷房のスイッチを入れる暑さに耐へかね

学校の教師らで作る野球チーム勝てば監督を囲んで一杯

この夏は暑いと言ひながら過ぎたり汗が首すぢにじつとりじむ
 年寄りにはクーラーはありがたしスイッチにてたちまち冷えて貴い温度

山 崎 英 子 東京

今日は隅田の花火大会父大好きで年々上京してゐたりし

昼の花火が美しく楽しみてゐて話はつきず語りてをりし父

父は自分でも花火を作りぬし小屋など建ててをり

何事も興味を持ちて季節ごと猟等の間は朝三時頃出かけたり

鳩や山鳥猟りきては美味しいと言ふ私は絶対食べられぬ儘過ぎき

いつでも花火があれば父に見せ度いと今でも思ふ

人には迷惑かけずに生き度いとそれのみ思ふこの頃

森 藤 ふ み 東京

朝六時ベランダ前に大型のコンテナ車止まるエンジン止めず

二時間余止まりてゐたるコンテナ車走りゆきたり荷下ろし時間か

冷蔵庫に残る野菜をメモに書き足りない物を買ひに出で来る

スーパーの野菜売り場の棚の荷のけふは少なめ天候ゆゑか

久々にきたる公園何処にも耳をつんざく蟬の鳴き声

ボランティアの人二三人盆休みのけふも花壇の手入れしてをり

この夏はいまだ西瓜を食べてない勤め帰りに子の買ひ来たり

大玉をいくつに切られし西瓜かなその一切れを子と分け食べる

桜葉 櫻 井 一 江 東京

真向ひの保育園の庭に立つ桜十五年近きをゆつくり伸び来

保育園の建つと同じに植ゑられし若木の桜二階まで伸び

幹からの枝は細く長く伸び桜葉こんもり形を成して

一杯に葉を広げたりしぼめたり生きる桜の姿垣間見つ

陽と陰に表情変へゆく桜葉に人の心の写しを重ぬ

園児らの午睡の時間静まりて猛暑の道にも人影少なし

晴海か豊海の埠頭より猛暑を突きて汽笛鳴り来る

有 泉 泰 子 山梨

朝顔の空へ空へと伸び行きて隣のイチジクと仲良しとなる

青空へ伸び行く柿の葉の緑ゆたかに育ち日陰もたらず
 新築の家静まりて主待つやどなたが住むや楽しみに待つ
 もの忘れ日毎に進むや今日もまた街で会ひたる友の名出でず
 新年に孫の書きたる「初夢」に「春の決意」が我を励ます
 水分とり外出控へてと広報の朝より流れ来今日も猛暑と
 職ひきて一年たちぬ夫のゐて掃除料理しピアノへ手を出す

富田 眞紀恵 富山

一日がすぎれば私の思ひ出も又一つ消えてゆくかな

春とふは新しいことがはじまると呼びかける声がきこゆる感じ

「かあさん」と幼の声が聞こえて今日も施設に夜が近づく

吾の名を一度も呼ばれることなく過ぎて過ぎし日数を考へてゐる

青木 初子 神奈川

三十度越える暑さの日日に体力意力食欲失せる

ジリジリと容赦なく照る太陽をどうにもできず人の力に

エアコンを使ひて命まもれと云ふ電力不足一言もなし

省エネの家電普及に国民の力の強き後押しもあり

二晩ほど扇風機の風に過ぎゐて気力の失せる怖さを知りぬ

扇風機の風では室温下げられず蒲団と共に階下に降りる

待ちに待ち降りたる雨の涼しさに庭の草を抜く力を得たり

二十分を目安に朝夕草を抜く気温低き日予報を信じ

中村 晴美 茨城

水不足稲の枯るるニュースありまた米不足か高値の予感

スマホにて無料ゲーム始めるも長き広告つぎつぎ流るる

向日葵の蕾のままに枯れており日々夕方の水やり虚し

やつと降る雨は激しく豪雨なり極端な天気からだ弱らす

お供へを言ひ訳にし高価なるリンゴと梨と葡萄を買へり

墓参り終へて寛ぐ夏の午後娘リクエストのホットケーキ焼く

近隣より今年も聞こゆ複数の車のドア音帰省の合図

吉田 綾子☆ 茨城

盆月に入りて目につく庭の草動きの鈍き己に苛立つ

猛暑ゆえ「御免なさいね」と言いながら庭師に頼む庭の手入れを

この暑さ負けじとばかり背に氷庭師夫婦の機敏な動き

一服よ！と声を掛ければすぐさまにボトルの冷水一気に飲み干す

ようやくに庭の手入れの終りたり心の重みいつか解けゆく

整然と清められたる広き庭盆を待つかに鹿の子百合咲く

異常なる暑さをよそに手際よく嫁御と孫とで盆棚を組む

御先祖の接待役は老いの我手鈍なれども心を尽くす

山口 嵩 福島

信達の西に連なる吾妻峰にゆれておぼろな夕日けだるし

「暑いーね」が昼夜のあいさつこの夏は人のエゴへの自然の警鐘

雨マーク期待すれども降る二ミリ田畑のひびは雨乞ふ叫び
ほつとする夜明けの空の雨曇りされどテレビは猛暑をつぐる
蒼天の校庭に並ぶ八月十五日記憶はただただ暑き事のみ
奉安殿の前に整列告げられし「言葉は？」小一八月十五日
あちこちが墨で塗られた読本を何も分からず読まされし秋
独裁の蜜に群がる人間の絶えざる限り戦禍は民に

橋本文子 鳥取

蓮開く池を見ようと急ぎ行く伯耆古代の丘公園

蓮池に白と桃色淡き色囲む山々緑の深し

池めぐり蓮見る人の少なくて蝉の音聞きてゆつくり進む

十時には蓮の花々閉づるとぞつましやかにほどよくまるく

トライアスロン走る途中頭から水かける係に希望者次々

夕暮れのトライアスロンゴールイン家族友らの合流もあり

酒向陸江☆東京

大戦の最中に外地で生れし吾記憶なければおぶわれ逃行

「赤ちゃんで帰れたなんて有り得ない」きびしく言いし友の哀しみ

「引き揚げ船の細き網梯子を登った」と三歳年上の友の記憶

大戦より八十年を経たる代に今また燻る争いの世界

プーチンは三日で終らすつもりとかまだまだ終らぬ国境問題

イスラエル・ガザのニュースを見る度にいたいけな子の他人事ならず

台船上で花火爆発のニュースあり戦争かくやと身につまさるる
人と人、友と友との諍いもささいなことから大きく膨らむ

天野克彦 大阪

起き抜けに窓ゆ入り来る蝉のこゑ今夏初めのよろこびの声

顔暑く陽はひろびろと空に充ち七月の山近づきて見ゆ

長生きもほどほどが美しと思へどもまだまだ生きてゆく気のつもり

明日より八月となる山脈はあかねに染まり暮れ初めにけり

佇立してテレビの画面に黙祷す八月六日八時十五分

雨雲が山のぼりゆく昼つ方蝉落ちてゐる外階段に

蝉鳴いて手のひらの中こそばゆし震はす羽のその強きこと

炎昼を女もすなる日傘さしコンビニへゆく煙草を切らし

朝の窓開けば入りくる蝉のこゑ裏も表もせみせみの声

レンズ

高松 美智子☆ 栃木

焦点の絞り切れざるわが視界ときに現実離れの感覚

評判の良き眼科医の待合室座り場なきまで混み合いており

文字を読む集中力も低下して眼球の疲れ気力も削る

老眼がすすみて遠視の矯正にわが眼にかかるオーバーク

眼の疲れ頭痛肩こり指摘され医師がすすめる遠近レンズ

思いのままに伸びて勢うタピアンがフェンスを超えて隣家に溢れる

寝たきりのストレス時に極まりて言葉にならざる声しぼり出す

亜熱帯の如きこの夏の庭に伸ぶ半夏生は丈一メートルに
この夏の進化あるいは暴走か半夏生はもうか弱くはない
体温を越ゆる暑さに順応をしてゐるらしき百日紅の満開
葉先より落つる雫のひと粒よまたこの庭に来よ雨となり
白過ぎず重過ぎぬ雲らしき雲浮かびてゐたりけさの青空
ビーズ館の小振りのドレスは徹子さん着用写真のありて納得
あれこれと昔のことを言ふ教科は性に合はずに「地理」受験せり
用があることは良きこと身支度し月に一度の齒のクリーニング
教科書に学びし昭和新山の茶の山肌に緑増えゆく

大塚 亮子 東京

掃除機を止めて大きく鳴く蟬の声聞く楓の天辺あたりに
楓の枝に鳴く蟬見つち飛び立つまでのほんの一瞬待ちて見送る
鳴き声にリズムあるらし休みては又鳴く蟬の動き目に追ふ
迎へ火は夫と焚くこと多かりき今年は娘夫婦の加はる
兄逝きて無人となりたるわが生家思ひ出おぼろとなりて建ちをり
干し柿にせむと柿の皮をむく母の手つきは機械さながら
髪のおを時折り針に移しつつ夜なべに母は繕ひ物せし
我が晴れ着縫ひある母に針の糸通すは私と傍に坐りぬ
電車のチケット取れずに諦めて盆の帰郷は秋の彼岸に延ばす

沸騰期

嶋田 正之 埼玉

直射光傾きたれば庭に置く月下美人に如雨露の水を
寒き日は部屋に取り込み暖を摂る心配りに花は応へて
四年間続き咲きたる月下美人今年も二つの花芽を膨らむ
この夏の異常気温を沸騰と表現したる事務総長は
化石燃料掘れよ燃やせよ温暖化関係なしと拳振る人
夏の過ぎいきなり冬になりゆくや二季となりたる去年の如くに
沸騰期いつまで続くこの地球子々孫々の息の苦しさ
鉢植ゑの石楠花の葉の枯れ初め水を遣れども青葉にならず
物心つきてかれこれ八十年未体験なる酷暑地帯に

野村 灑子 千葉

水をそそぐといふ意味ありて今夏の猛暑に「灑」とふ吾の名前にむきあふ
金木犀銀木犀凌霄花など枝枝伸びれば騒がしく皆背丈程に伐る
刃のなべてとがれある重き包丁に鰹の頭はおとされにけり
キャベツの葉二枚はがして鍋に入れ作るスープが体ぬくめる
隣より「毒ある」と度々聞けば美しき花ながら凌霄花下がるを伐りぬ

江波戸 愛子 ☆ 埼玉

白百合も黄鹿の子百合も花おとし鹿の子百合の蒼ふくらむ
金柑の花を見ながら思いおり友の詠みたる金柑の花
盆棚を調べて行くちちははのお迎え提灯新しくして

父と母迎えに向かう運転席この頃いつも娘の座る
盆に入り霊園内は一方通行入り口出口に警備員立つ
近隣の農作物や卵買い供える花も求めて墓へ

車より出でて公園の草刈りをしているご夫妻に頭を下げる
霊園より連れ帰りたる父と母好物ならべて両手を合わす

橘 美千代 新潟

検査キットにみる間あらはる二本線コロナ禍以来初めて感染（新型コロナ初感染）

ウィルスにのつとられたるわが体放送休止の音なりひびく
ウィルスも学習したり殺さずに動き回らせば撒くが良し

初めてのコロナ感染にこもりある一日暮れゆく空の果てあかく
東港まぢかき道沿ひ並び立つ風力発電かぜの王国

聳え立つ風力発電まはりある羽根の影さすその下をゆく
やうやくに降る雨はげしも夕べやみ草木もほつと深呼吸せり

十一時に到着せむとわが市のみ覆ふサイズの雨雲警報

ブレイクあずさ☆ カナダ

それぞれの小さき頭に八月の光を乗せて波走りたり

八月の光の生み出す陽炎にヨクナパトーフア一瞬過ぎる

冴え渡る八月の空をゆつくりと行くヘリコプター赤きボディに

地球よりアンモナイトの消えし日の大気を思う山火事の朝

火は猛り大地ひからぶペルム紀の終わりに似るや今の地球は

苦しみに違いはないのに 長崎を訪ねる人は少ないと聞く

原爆を誇るアメリカ「アトミックボウル」にはしゃぐ爆心地にて
アメリカンフットボールの試合あり長崎焼かれて五か月ののち
生きるもの町ごと山ごと破壊して正義と言ひ張る戦争今も

田 端 五百子 岩手

山藤の巨木の桜からめとり淡きむらさき天空飾る

「汁気日和」と垣根に佇む友言ひき直に海霧街覆ひくる

境内の葉桜降りくる斑陽をランドセル鳴らしけんする少年

空色のズックの少女軽やかに溜まり水に映る雲を超えたり

甚平着て昭和の匂ひするをとこ妻に遅れて夜市覗き居る

盆栽を磨く主の袖たもと晩夏の風が揺らし過ぎ行く

主逝き誰も摘まない梅の実が歩道まろびてダンプに轢かる

山 本 三 男☆ 群馬

立ちくらみ薄れる意識で手を伸ばし柱つかまえ倒れずにすむ

七月の半ばの朝の散歩路に早やコオロギの鳴き声を聞く

昨年の如き激しき咳はでず猛暑耐えればまた秋が来る

夏の陽の照り付けるなか紫のムクゲの花は清らかに咲く

寝室にクーラーかけて昼寝する猛暑続きて日課となりぬ

わが植えし柿の若木の成長を見守りゆかんあと何年か

治すには抜くしかないと医師の言い治療をせずに歯科より帰る

この日頃日の出る時刻遅くなり散歩の時刻も遅くなりたり
コメントに応えんとして暑き中汗を流して動画を作る

中 村 哲 也 宮城

木陰にて煙草を吸へば消音の筈のスマホに警報が鳴る(7月30日)
音を消しスマホの津波警報の文字に目の前会社へ急ぐ
完全に山側向かふ仙山線津波警報あるも通常

津波警報未だ続くに常のごと出社し帰宅すひと日不思議に
帰省せる鹿角の陽射し強けれど家屋を抜けて吹く風涼し
街頭を離れて観たる星数は紛れ無きなる古里の空
菊の葉を凝らして見れば動かざる蟪蛄ひとつ久方に見る

友を悼む

姉 川 素枝子 福岡

われの名をよびて別かれを言ふ声は友の今はの時にあらずや
受話器よりとぎれとぎれに伝ひくる友のその声これの世のこゑ
さやうならふただび三度くりかへし電話を閉ぢる一劫の音
掲諦ぎやていの訳ききたれば禅僧は呪言じゆこんにてあれば分からぬと言ふ
呪言をば祈りのことばと思ひつつ夜よる拝む観自在菩薩
中一緑の子冬緑をさなき吾子は緑と呼びゐき
裏庭につなぎてをりし冬緑咳してをりき乾く声にて
獣医師の日びの注射の甲斐のなく吾の嘆きは長くつづきき
血統書のこりてみると息子いふ緑ろくよみがへる犬といへども

井 上 菅 子 山形

外科に行くため歯医者の子約変更すメンテナンスのために日々あり
母川回帰の牛渡川晩秋の景思ひ出づ鮭食ぶるたび
耳遠き兄との筆談書き残るノートの続きに一行日記
暑いから今日は背広をお脱ぎなさい遺影の夫に言つてみる
雨降らぬ梅雨も明けたり膝丈にオクラは咲きて実を生らすとぞ
生前に夫が愛した鰻重を土用に二回供へて食ぶる
民家の敷地に入りたる熊が追はれゐる早くお逃げよ撃たるる前に
営業用の貌と家にゐる顔の違いを見たり半夏生揺る
今日は何も為すことがなく半日を方代歌集読み放題

井 上 楨 子 新潟

スーパーの駐車場にて騒ぎある小鳥は鴉に子を奪はれて
ザリガニの大量死などの報道にわが池の水温手許に確かむ
草刈機の音に驚く錦鯉ら渦巻くさまは壮観となる
早朝の舗道に風をはらみたるビニール袋を野良猫が追ふ
そそけ立つ形の様の積乱雲定まらずして早も崩るる
俄雨わづかに降りたる昼過ぎの日照りは増幅されつつ熱波となりぬ
窓ガラス直に酷暑の陽が射せば瀬戸焼の人形に命宿ること
境内の真上に広く打上げは闇の舞台に大掛りなる
早朝のあちこち散らばる紙屑の認識根拠は花火の破片ぞ

八月号冬雷集評

桜井美保子

空地埋め直に育ちたる露あまた母思ひ
つつきやら露にしたり 山崎英子
収穫するとか摘み取るとかの言葉を省略して母を思いながら、きやら露を作ったことを前面に出している。一連には母君が毎年きやら露を作って送ってくれたという歌もある。

マスクして目深に帽子かぶる二人次に
会へても解らぬだらう 森藤ふみ
何やらミステリアスな歌だが、これは散歩の折に出会った見知らぬ者同士のこと。ひととき会話を楽しんだあと、別れていく。マスクと帽子が互いの顔の印象を明確にはしていないと見たところに独自の表現があり面白い。

昼食は俺が買つて帰るとぞ脚の調子の
良いらし今日は 有泉泰子
夫婦の日常の一場面。夫君の言葉を一首に収め情感温かく詠まれている。お昼の食べ物を買って来てくれることは有難

いし、それ以上に嬉しいのは夫君の足の
具合が良好だと思えることである。

五十肩再発痛し姑に貰ひし湿布効き目
良好 中村晴美
筆者は肩の痛みを経験していないが、

五十肩は辛いことだろう。一度は快復したのにまた痛んで、どうしようという時にお姑様から貰った湿布薬が効いた。作者の感謝と信頼の思いが籠った。

夢に来て関口正道なにか言ふ口は動け
どこゑは聞こえず 天野克彦
関口氏が亡くなってから四年近くにな

る。氏と作者は友人同士。急逝した友と会えるのは唯一夢の中だが、その声が現世にいる者には聞こえない。口もとは見えていないのに。

潔水を求めて来たる故郷の嵐山溪谷の
ポイントに坐す 嶋田正之
絵のテーマと定めた水の景を求めて故郷の溪谷に来た。「ポイント」はその題材とするのにふさわしい場所、位置か。

幼い時から故郷の自然に親しみつつ、その清冽な流れに畏敬の念を持つ。嵐山溪

谷の潔水を描くことの気迫が感じられる。
孫つくりくれたる古き風ぐるまときに
勢い増してまわりぬ 江波戸愛子☆

単純化された表現の中にお孫さんへの愛情がほのぼのと感じられる。思い出の風ぐるまを大事にして、風を受けられる場所に置いてある様子が目に浮かぶようだ。下旬、風ぐるまの動きを鋭く切り取った。

庭土に移して年どし幹ふとり枝垂梅さ
く老い忘れよと 姉川素枝子

その梅は最初、植木鉢などで育てていたのかもしれない。それが庭に植えてからぐんぐん成長したようだ。枝垂れ梅の描写から一転、心情を表現した結句が味わい深い。

土の配合平仮名書きにメモをしてくれ
たる多肉売場のをばさん 井上蒼子

多肉植物の売り場の人はとても親切。その人を「をばさん」と詠み親しみを込めている。和やかなやり取りを捉えており作者の人間観察が実に温かい。「平仮名書きのメモ」に「をばさん」の風貌や年代なども思われる。

八月集／残響集評

鈴木やよい

中腹に種まき爺さん見ゆる程冠雪溶け
たる鳥海山は 本間志津子

春先のニュースで時折見かける雪形だ。鳥海山の山肌には「種まき爺さん」が現れるようだ。春の到来と農作業の時期を知らせるという雪形に作者の心も弾んでいるように思う。

再三の友の電話に時として居留守を使
ふ気は咎めつつ 梶尾栄子

再三かかってくる電話には出たくない時もあるだろう。居留守に気が咎めると言う作者ではあるが、仕方のないことだ。自分の時間も大切にしなければ。

歩かねば歩かねばならぬ歩かねば目標
の生協までどうにか歩く 東 ミチ
生協へ往復歩いて千三百歩余り靴脱ぐ土間で膝とすねを揉む 同

一首目では、歩かねばという気持ちで三回も重ねて表現している。自分自身を律する強い意志に圧倒される。

二首目では、何とか生協まで往復したようだ。靴を脱ぐ時の安堵感と達成感が伝わる。目標を決め、実行しようとする姿勢がすばらしい。

いとこの子の障害者年金請求は謎解き
のごと証明得るまで 藤田夏見☆

役所の手続きは煩雑なことが多く苦労する。作者も大変な思いをしたようだ。「謎解きのごと」に実感がこもっている。

袱紗持つ師の指先が軽やかに畳みゆく
形難しかりき 永野雅子☆

亡くなられた茶道の師を偲ぶ一連の歌の一つ。何も知らぬ世界でやさしく指導してくれた師。入門したての頃に見た師の指先の動きが今も心に刻まれている。

履き慣れた少しヨレヨレのGパンの安
心感にまだ捨てきれず 川俣美治子☆

少しくたびれたGパンがまだ捨てきれないと言う作者。着慣れた服は古くなってもなかなか捨てられないものだ。安心感がよくわかる。

尾花沢の道の駅にて懐しき黄粉団子食
む生家への途中 井上鈴子

生家に向かう途中に寄った道の駅。懐かしい黄粉団子の味に昔の記憶がよみが

えっているかもしれない。さあ生家ももうすぐだ。

コシアブラ天ぷら旨しキャンプ地の武
甲温泉タープの下で 益坂順子

コシアブラはタラの芽と同じウコギ科の山菜で、香りとコクがあり天ぷらがおいしいとか。キャンプ地で食べるのはまた格別だろう。多くの山に登った作者の歌にはずいぶん楽しませてもらった。

世界地図を卓に拡げて探しており息子の
出張先オマーンは何処 塚本節子☆

息子さんからオマーンに出張すると連絡があったようだ。馴染みのない国への出張に少し不安を感じているかもしれない。それでも世界地図を広げ、積極的に場所を探している。

父と行く日帰り温泉出るときに落ち合
う場所はアジサイの横 片桐美穂子☆

お父様と旅行に出かけた作者。仲の良い父娘の関係がよく表れている。落合う場所がアジサイの横というのが素敵だ。

大友柳太朗と美空ひばり⑤

—その短歌と情—

大山敏夫



映画『月形半平太』(1952年)で「春雨」を踊る美空ひばり。

謡曲『田村』は坂上田村麿の霊と僧侶の接触交流を描くもので冒頭は(田村麿と縁深い)清水寺の桜を樂しみながら、ゆったりと進み、次第に激しい展開となつてゆくのだが、殺陣は、そのテンポに合わせるようにだんだん複雑な動き多人数になつて激しく盛り上がりつてゆくのである。言つてみればこの「殺陣」は時代劇には欠かせぬ重要な要素、技術であり、これを演じきれたという事実は、その後の時代劇スターとしての、大友柳太朗復活の起爆剤たり得た。敗戦直後の事情とはいえ、こういう演劇場は結構いち早く復興を遂げている地方も多かった。住いに近い関西圏が多くなっているが、この地方の環境が芸能関係の巡業地としては開かれていたのかと思う。

美空ひばりも昭和二十二年九歳の春、日本調歌手で知られる音丸を座長とするもとの前座をつとめる巡業で、大友

柳太朗と同じように、愛媛県から高知県を回っていた。そして文字通り九死に一生を得るといふ大事故に遭遇する。

高知脳神経外科病院が発行している「みつる(154号・令和2年5月31日発行)」に関連する記事があるという。「美空ひばりと嶺北地方(上野脩幸氏が投稿)」と題するもので、記事は大豊町郷土史家の鎌倉登氏の私製の本を元に、バス事故を知っている患者さんへの聞き取り証言を交えて、その時の様子について書いたとある。それによると、昭和二十二年四月二十七日に、旧本山小学校で公演があり、その日は小学校に泊まったのではないかと具体的な証言を得ている。この地は吉野川沿いにあり、昭和四十年に町内の三つの小学校が統合されている。小学校での公演というのも、そこに宿泊というのも、如何にも終戦直後という背景を思わせる。そして翌朝9時前に、次の巡業先に向かうためにバスに乗る。

当時の記憶が記録として残されている。四月二十八日、大豊町大杉に於いて乗ったバスが崖から滑落、九歳の小さなひばりはなだれ倒れた人らの下敷きになつてしまう。この事故では車掌が亡くなっているが、事故現場に、ひばりはその車掌さんと並べられ布を掛けられて寝て居たという。瞳孔が開いた仮死状態。たまたまその場に居合わせた医師が適切な対応をして、本当に奇跡的な蘇生を果したのである。その時の蘇生第一声が「音丸先生は大丈夫ですか」だったのだ。

齋藤慎爾著『ひばり伝 蒼穹流滴』(二〇〇九年講談社刊)

には当時の新聞の記事を引く。

「車掌山北梅香さん(18歳)は即死、乗客のうち井口静波、音丸のコンビと共同巡業中の楽団美空一座の看板スター美空和枝ちゃん(9歳)は全身骨折の重傷。和枝ちゃんはガラスの破片で左手首動脈を切っており、経過を危ぶまれている。」(高知新聞昭和二十二年四月二十九日朝刊)

九歳ながら「楽団美空一座」の事実上の代表なのである。それにしてもわずか九歳の小女が、こんな第一声をするものだろうか。殆ど伝説がかった話と言える。

美空ひばりは昭和から平成へと切り替つた年(一九八九年)の六月に、五十二歳にて彼岸の人となった。本人も驚くほどの若さで、さつと身を隠してしまつたという感がする。

その訃報を知つた福島泰樹氏が、「福島さん、一週間で二〇〇首作れますか」と依頼されて作つたのが『蒼天 美空ひばり』(株式会社デンバー・プランニング・アイベック刊)という歌集になった。亡くなつた年の十月十五日発行と奥付は記す。このスケジュールはかなりハードで、誰にでも出来るわけではないが、第一歌集『バリケード一九六六年二月』(一九七八年新書房刊)の出版記念会で、突然会場の灯を消した中で始められた自歌の熱唱から始まつたのが福島氏の「絶叫コンサート」であった。その後継続して開催されていくコンサートを経験があれば「一週間で二〇〇首」作ること

など、その二〇〇首をストーリーとして構成する技など福島氏にとつては難しくはないことであつたかと思う。

言わば美空ひばり追悼歌集となる『蒼天 美空ひばり』であるが、動機が自らの意思ではない商業出版社からの依頼で時間との勝負の一週間で詠んだ書下ろし作品だという点がこの書の性格を物語っている。

福島氏の眼から見た美空ひばりと、伝聞の数々をかき混ぜ、さらにそこへ自分自身の生き様も投入するという極めて福島的なものを一気呵成に詠みあげた熱狂的な勢いで構成されている歌集だと思う。その歌集の中の昭和二十一年の作に、

九歳にして楽団をもちしかな素人楽団なれど青空

というのがあり、これは端的にうまく言い得ていると思つた。ただその楽団の四国巡業を歌つた翌二十二年の作品の、

あまたなる苦難の初めバス事故に遭う十歳の土佐の曙

になると「？」である。先に触れた九死に一生のバス事故をさすのなら、正確にはまだ「九歳」であつたと高知新聞の記事が証明している。まあそれは、年齢には「満」も「数え」もあるし、何故かこの事故は「九月」の事と言う人も多いので大きな問題ではないが、既述のような恐ろしく重い事故内容を知るものにとつては、「土佐の曙」などという呑気な芝居がかった結句は状況に適さず余所事にしか映らないだろ

う。また『蒼天 美空ひばり』昭和三十二年の中には、

音丸姐さん市丸姐さん現われてげに厳格な風の夜となる
があり、「？」である。この歌の中の「音丸姐さん」が、美
空ひばりと共に巡業中にバス事故に遭った「音丸先生」（ひ
ばりの言葉）なのか。一連には、△塩酸を顔にかけられたる
ことも戦後を背負うと言わんか友よ△もあり、美空ひばりが
十九歳での浅草国際劇場事件のあった年だ。△朗らかに笑顔
振り撒き三味鳴らし 赤坂小梅が街道をゆく△の歌があつ
て、取りあげた△音丸姐さん市丸姐さん……△に続くのだ。

「音丸」を市丸、或いは小梅姐さんと一緒にたにしてはな
らない背景がある。市丸と小梅は座敷で芸を売る芸者であつ
たが音丸は違う。音丸の「丸」は「音は丸いレコードから」
生まれるという洒落た意味の「丸」なのだ。ただその音丸
も、当時人気一杯であつた市丸や小唄勝太郎を地方巡業へ連
れて行くには大変な玉代がかかってしまうことから、そうい
う費用の心配ない歌手を育てたいという事情で、当時常磐津
の名取だった祖母をもち、本人も筑前琵琶を修行し小唄など
を唄っていた十代の音丸に白羽の矢が立ったものである。音
丸の「船頭可愛や」（一九三五年 昭和10年）が大ヒットする。
翌年には「下田夜曲」「博多夜船」が大ヒットし、市丸など
の芸者歌手に負けないような人気を獲得する。

音丸は麻布の履物屋の娘であり、公演中にも「いよつ、下

川右太衛門、その相手に山田五十鈴という豪華配役だった。

△春雨に しっぽり濡るる鶯の

羽風に匂う 梅が香や 花に戯れ しおらしや

小鳥でさえも 一と筋に 寝ぐら定めぬ 気は一つ

わたしや鶯 主は梅 やがて 身まま気ままになるならば

サア 鶯宿梅じゃないかいな

サアーサ なんでもよいわいな

これが「春雨」である。とても十五歳になったばかりの少
女が意味をすべて理解出来とは思えない大人の歌だ。

この映画の一年前にも『母を慕いて』（斎藤寅次郎監督）の
中で舞妓を目指して学ぶ少女を演じていて、幾つか続けて踊
る姿を見せていたのが、一年後の舞姿に繋がった。

また『月形半平太』に続いて公開された映画『牛若丸』（大
曾根辰夫監督）では、初めて男女という二役を演じた。鞍馬
山時代の義経（牛若丸）と共に育った幼友達の桔梗という役
どころ。いよいよ源氏再興の旗を上げるために、鞍馬脱出を
図る牛若を助け、身代わりの罫りとなって果てる桔梗は、恰
かも義経と浄瑠璃姫の話を思わせる展開だった。この映画、
牛若が母親の常盤御前を慕い密かに逢うシーンも含めて、非
常に「浄瑠璃」色濃い内容となっている。悲恋の浄瑠璃姫の
情を、十五歳のひばりは情熱的に演じていた。この映画は美
空ひばり自身が強く希望して実現したとも伝わっている。

そして、二十代の美空ひばりはすっかり大人の女性となり、

駄屋の娘！」の声がかかると、「よっく、ご存知で！」と小
粹に応じたという江戸っ子であつた。そういう音丸が「美空
一座」の美空和枝を気に入り、自分の巡業へ連れて行きたい
と思つたのは、幼いひばりの姿に自分の小女期を重ね、また
その才能の凄さを見抜いていたのであろう。ひばりの家は「魚
屋」で親近感もあつたかもしれない。なぜ幼いひばりが「音
丸先生」と敬い慕ったのかは、その後の歌手としての足跡を
辿れば見えてくる。

音丸は芸者歌手の市丸や小唄勝太郎に比肩して語られるほ
ど芸事（常磐津、長唄、小唄）をこなし、しかも日本調歌手で
もあり、何より特徴的なのは、地方巡業を活用してその土地
土地の古い民謡や子守唄等の採集を行った。そしてそれを
自身の歌のレパートリーとして取り込んでいったのである。
有名なのは熊本五木に伝わる「五木の子守唄」で、これは
一九四八年（昭和23年）に音丸が見出して広めたものであつた。
この音丸の姿を身近に幼いひばりは観て感銘を受けた。後年
の美空ひばりの歌に取り込まれる邦楽性（常磐津、長唄、端唄
等）、都々逸や民謡等はここに源があると云って良いだろう。

その美空ひばりが、映画の中で舞妓を演じて「春雨」を歌
い踊るのは『月形半平太』（内出好吉監督一九五二年 松竹）で
十五歳の時となる。雛菊を演じてかの有名なセリフ「月様雨
が！」「春雨じゃ、濡れて行こう」も言う。月形半平太を市

映画の中で芸者の役を演ずることも多くなる。代表作が「べ
らんめえ藝者」シリーズだが、これらでは盛んに芸事が披露
される。歌舞伎、浄瑠璃を取り込んだものとか、端唄に踊り、
様々だ。当然ヒット曲も多く生まれてくる。「車屋さん」（米
山正夫作詞作曲）には都々逸が織り込まれた。

△人の恋路の邪魔するやつは 窓の月さえ 憎らしい

あてにならない お人はばかよ あてにする人 もっとばか

主に口語で7775の調べ、都々逸だ。

次の「お伊勢参り」は端唄で、映画の中で芸者姿のひばり
の歌つたもの。

△お伊勢参りの 石部の茶屋で あったとき

可愛い長右衛門さんの 岩田帯 締めたとき

7音5音（破調あり）が不規則ながら続き、最後を5音で
締める調べ。もう一つあげると、艶っぽい「縁かいな」、

△夏の納涼は両国の 出船、入船、屋形船

揚がる流星 星くんだり 玉屋が取り持つ 縁かいな

757575の調べとなり、いずれも5音で締めている。

端唄と小唄の違いは、三味線を撥で弾いて歌うのが端唄で
あり、指の腹で弾いて歌うのが小唄だという。詞の方には特
に定まった規則は無いようで、語調も長さも内容も様々なの
だが最後を5音で締める形が多いようだ。美空ひばりには、
こうした邦楽の趣、調べがすっかり身に沁みていて、ふとし
た時にも思わずこぼれ出てしまったようである。

（続）

作品一

桜井 美保子 神奈川

手の体操むすんでひらいて余所事と思ひをりしが指の強張る
スーパールのレジで釣り銭手に受けて曲げたる指がなかなか戻らず
違和感のある指に握る包丁に力を入れず野菜を刻む
塗り薬で様子見ますかとテーピングの仕方ふた通り教へくるる医師
蛇口の水両手に受けて顔洗ふどうか出来てうれしき朝よ
我が手にも休息与へむパソコンを消して続き読む『新・平家物語』
包丁を握りにくき時のためカット野菜を使ふ手もある
ベランダの月下美人に新しき葉の育ちを朝ごとに寄る
花咲くは来年ですか待つてます声かけながら水をたつぷり

正田 フミエ☆ 栃木

冷房をつけて寝るのは心地良しされど寒くて冬パジャマ着る
高温の夜の続きで冷房を付けて寝るのが常となりゆく
高齢者の運転免許更新に認知検査の暗記くり返す
高齢者の運転免許更新を終えて手にする免許証重し
息子から高齢者マーク貰いたり車に付けて運転せよと

七月に二回目のキュウリの種をまき本に確かむ育苗のコツ

すくすくとキュウリの苗の育ちいて遮光栽培初めて挑戦

高温にぐったりしてるキュウリ苗に夕方なれば地下水注ぐ

飯塚 澄子 東京

七会派集まる墨田の吟詠会区民参加や詩舞剣舞入り

吟詠のコンクールもあり十五六、会派違へど吟詠の妙

バスを待つ席に雨滴の落ちてくる夜来の雨の名残りの滴

日暮里行きバスにて奥浅草で降りて待つ本数少なき上野公園行きを

奥浅草通りに並ぶビル街は十二、三階林立なしぬ

墨田区の灯籠流しと浮世絵展ビル入口に掲示されをり

あと五分バス到着の時刻知る人らバス停に集まり出しぬ

斉藤 トミ子☆ 栃木

さるおがせ樹齢三百年の杉の木に数多付きおり山門の前（雲巖寺）

蔓延れる草に紛れるジャガ芋の茎探しつつ収穫したり

買い置き芽が出たジャガ芋植え付けて十匁程の収穫となる

ジャガバター、フライドポテト、いもフライ我が育てたるジャガ芋を食む

蜻蛉かな蝶かなと思ひ撮る写真蝶蜻蛉なるとスマホに知りぬ

蝶蜻蛉準絶滅危惧種なるといふ唐沢山の麓に見つく

大き笹三つに梅を並べ干す漂う香りを存分に吸う

俗に言う梅雨明け十日の晴天に梅を干すなり三日三晩を

暑さしか浮かばぬ今は子供時代ワクワクしていた夏休み前
三年間感想文は龍之介中学生の夏ふと思ひ出す

大の里の取り組みだけは見たくなるヒーロー好きは幾つになりても
白生地 of 昔ながらの長日傘使わないのに捨てられもせず

ほとんどの食品値上げに留まらず日用品や交通費も

同時期にインフラ整備成した為作り直しも重なりてくる

毎日の戦争被害に改めて人命無視に恐怖増してくる

ロシアに派兵の朝鮮兵ウクライナの捕虜にはなるな自爆せよと

岩 淵 綾 子 岩手

トカラ列島に地震が襲ふ現代の科学も解せず鎮もるを祈る

二千回余の地震におびえる島民の今を思へば吾が身のごとく

気の滅入る日々のニュースに驚きぬ熊の被害に不埒な輩

熱中症警戒アラート発令中長く雨降らず稲穂を案ず

「わが町バンザイ」にサンアンドレス公園震災前の思ひ出あまた

ふるさと創生一億円の記念公園津波に耐へし展望台あり

サンアンドレス公園訪ぬればはからずも鐘鳴る二時四十六分に

田 中 祐 子☆ 埼玉

長男の作り呉れたる和風なるカレーを食べる「スパイスどう？」と

休日ふたりで料理を作るとぞ子のなき空間上手に過ごす

十二分に百日草は咲き呉れて猛暑続きに水撒き必至

早朝の庭の水撒き楽しかりホース伸ばして心も洗う

遙かなる初恋なりきコーヒーのカップとあなたをぼうっと見てた

足腰の思うに任せられなき日々手前体操真面目にこなす

倉 浪 ゆ み 埼玉

歌会に参加してから変はりしかやや長くなる推敲の時

何とまあ先入観と違ひしか歌会は和む師の話にて

美空ひばり「角兵衛獅子の唄」と問へば答は返る鞍馬天狗と

ふき掃除すれば汗がしたたりて水玉模様となりたり廊下は

期日前投票に行きし参院選我の願ふ結果とならず

早苗田に白さぎ一羽佇みて静寂が包む墨絵の世界

大木となりたる公孫樹見上げつつ落葉の頃を思ひ心は沈む

鮮らけく朱に色付ける唐辛子水を注げば辛き香漂ふ

林 美智子☆ 東京

八月の十三日は盆の入り車にてまず高尾霊園へ

花を積みシェパードを乗せ家族四人狭い座席で毛だらけになる

幸いに曇り日なれど気温高く花供うる間も汗が流れる

義父義母と嫁のお墓の清々し線香焚きて心鎮まる

いちよう並木通りて八王子の我が兄の墓に立ち寄る新盆なれば

兄二人と母とで富山から移したる墓に刻まる嘉永三年の文字

墓誌の端に兄の名見れば悲しくもこれで墓じまいと言われておれば
そして町田夫の姉夫婦の墓に参る迎へたる霊で我家はいっぱい
用水を百日紅の花びらが流れるを見れば心なごみぬ

松 中 賀 代 ☆ 高知

畑すみに株を増やして夏茗荷夏の料理に欠かせぬ一品
昔から御在所山に雲かかりや雨が降るぞと言ひ伝えあり
檜扇はレモンの木陰に守られて蕾つぎつぎ長く咲きつぐ
放置田は夏草繁りたくましい粟立ち草が一面広がり

どうしても思い出せない野菜の名夕方に來てセロリが匂う

大雨は異常気象か何もかもこの名を付けて農夫は語る

二歳児に曾ばあちゃんと呼ばれていて卒寿の吾は胸あつくする

鈴 木 やよい 東京

町会の焼きそば売りの休憩に近況聞き合ふ汗を拭きつつ

夏祭りの手伝ひ終はりお礼にと焼きそば三つ貰ひて帰る

カメムシが列なす茎に驚きて何とかせねばとガムテープ持ちくる
片肘つくロダンの像は強烈な日差しはねのけ一点を見詰む

灼熱の太陽のもとに苦悩する「カレーの市民」の真黒き目元

ディズニーがペイントされたる新幹線に心が弾む墓参りなれど

座席にて弁当急ぎ片付けてパソコン出す人まだ嘯みてをり

炎天の墓石に水をたつぷりとかけて祈りは短く終はる

本 郷 歌 子 ☆ 栃木

休耕田を覆いつくして葛の葉は尚道半ばまで蔓伸ばしおり

口を開けた無花果がほらすぐそこに腰まで伸びた荒草が阻む

緑濃き山々重なる彼方より入道雲の白く立ちたり

大花火ドーンドーンと上りゆき空押しあげると爆ぜてゆきたり

人も蚊も暑さを避けて動きおり夕べの水遣りに蚊どもが刺しくる

うす紅の皮をそうっと剥きゆけばしたたる汁の甘き桃の実

右の肩痛めてままならぬ事多し掃除草むしり南瓜を切る事

露天風呂に夏の風吹ききたり湯から上りて素肌を委ねる

村 上 美 江 岩手

最早もう未経験の暑さだと気象予報士は「命に係はる」と

天気予報はじめて耳にすることの「最高気温」の更新ばかり

蕩けさう太陽の熱厳しすぎ未だ未だ続く夏真つ盛り

欠き氷アイスクリームキャンディーといつもの夏の何倍もあり

さうめんもうどんもパスタもレトルトもカレーもレンジの世話になりけり

熱中症になつてをられず兎も角も今日一日を遣り過ごすのみ

初盆の御参り母娘タッグ組み声かけて廻る順番つけて

家族中一番元気な義母なりき施設の中でも一番人気

伊 澤 直 子 ☆ 東京

万博の大屋根リングを見てみたいと言えば娘はすぐ計画す

万博の大屋根リングの上からは遠く明石海峡大橋臨む
入館に七時間並ぶとイタリア館そこまで並べぬこの年齢では
イタリア館夕方七時を過ぎたれば列は短くなるとか入れり
イタリア館ミケランジェロやダビンチの作品ありて心ときめく
大阪を本拠地にする建築家安藤忠雄展はグラングリーン大阪
映像と模型で見せる作品は作家の心届きたるもの
作品と模型はそのまま縮小版みな精巧たりて近寄りて見る

乾 義 江 ☆ 茨城

かったるいと思いつつ自転車にて用足しに猛暑の真昼眩暈の襲う
看護師の指示の救急車に車中での検査異常なく行きつけの医院へ
検査と点滴二時間にて帰宅する如何ともしがたき眩暈と言うは
気持ち良き快音響かせ大谷の球スタンド越えて海に飛び込む
木の葉さえ揺れる事なく気を揉みし台風海を北上して行く
今日は降るか明日は降るかと待ち侘びれど願い空しく続く猛暑日
赤羽氏の詠草思い出し熊手を買う散らかる巡りに何とも便利
原爆のカラー化されたる記録写真落ち行く雲に尚衝撃受く

永 光 徳 子 ☆ 東京

遠き日に義母が好みて植えた花ヒトリシズカは年々に咲く
松の木の落ち葉もたげて凜と咲くヒトリシズカは静かな魅力
指先でつまめる程の小さき花群生すれどひとりしずかに

松の木を切り倒したるその日からヒトリシズカは姿を消しぬ
体調の不調つづいて家籠もり窓から眺む夏空の雲
剪定を怠けてしまった百日紅自由に伸びて誇らかに咲く
夫逝きてひとりしずかに早七年晴れの日もあり曇る日もあり
背を伸ばし頭を上げてケセラセラ楽しみの欠片拾い集めて

白きドレス

松 本 英 夫 東京

「題名のない音楽会」収録の当落メール今宵来たらず
朝起きてスマホ開くれば「当選」の文字ちらり見え妻を呼びたり
スペシャルなゲストとは笑みたたへたるサラ・ブライトマンわれ上ずりたり
二回落ち諦めかけたる当選に思ひもかけぬサラを見るとは
透きとほるたをやかな声サラ聞きて思ふは明治を駆けし人人（坂の上の雲）主題歌
二階より双眼鏡を握りしめ見つむるサラの笑みと手のふり
歌ひ終へバックをたたへ笑まひするサラ・ブライトマン白きドレスに
鳴りやまぬ拍手に応へサラ歌ふTime to say goodbye 船出のやうに
音楽会帰りの電車の前の席老女の一人プログラム見入れり

戸部田 とくえ 福岡

日々の暮らしを短歌に生み出せばまことに理想とけふも思ひつつ
トラノ尾の花咲鉢を先づめでて朝の支度をけふも始めぬ
涼やかな花の縁起を信じつつトラノ尾の鉢にいくたびも立つ
けふ友の八十四誕生日同じ歳ゆる愉快に祝杯

窓近く雀の鳴くこゑ限りなくしみるいとしさ仏飯を撒く
 ラジオより流るる楽の心地よき「東京音頭」に思はず手拍子
 とりどりのグラジオラスの咲く庭に暫し憩ひぬ英氣につつまれ
 炎天の下交通整理せる人の尊くをさめて頭を下げつ
 お隣に目高を貰ひ飼ふ覚悟泳ぐ姿にみほるるばかり

大塚 照 美 兵庫

「夏は来ぬ」歌へば楽しアイロンかくるシャツブラウスは軒端に揺れて
 盥にてプール遊びをせし娘は幼馴染みらとけふは酒席に
 活け花の出品けふにて辞むる友の夫君より賜ふ自作の湯呑み碗
 空襲の夜の山辺を逃げ廻りし疎開先きの幸は床几にての合唱
 頑なる叔父の入信あやぶめど決め手を知りつ戦友といふ
 庭のへに沈丁花植ゑて三十年ひろがり見せて庭石ふめず
 一年振りの電車に乗らむと杖のわれホームと電車のはざまにたぢろぐ
 構へたる形の姿そのままに王者の死を見つ庭のカブトムシ

吉 村 昌 子 千葉

じやがいもの花咲く畑に紋白が何組も飛ぶもつれつつ飛ぶ
 紋白の飛ぶじやがいもの畑見つつ今日の散歩は止まりつつ行く
 去年の種こぼれ咲きたるパンジーを散歩の人が庭ほめて行く
 家近き自衛隊より飛行機が飛び立ち行くがこのごろ多し
 蝶達がこんなにも来てくれるとは来年はもつと花を植ゑよう

家前の公園のめぐり掃除してゐるわれに行く人声かけくるる
 毎日の散歩に出合ふ茶の犬がわれに寄り来て尾を振りくるる
 さはつてもいいですかと聞き犬の頭ゆるりとなづる可愛いねと言ひ

三 好 規 子 福岡

子と汲みし池山水源の産山うぶやまの水にて冷蔵庫の水を作る
 バイタルのチェック後あさあさ散歩する今日は図書館に行き本を借りむ
 昼下がりにスタッフに言はれエプロンを畳む仕事す微助ビスケット人と呼びて
 大阪の黒門市場に似る福岡の商店街にて買ふさくらんぼ
 いろ紙にて輪などを作り短冊に戦争やむ様かき笹に吊るす
 織姫と彦星の話しに七夕の歌をうたへり幼にかへりて
 七夕膳糸に見立てる素麺に星の人参オクラの散れり
 公園の藤棚の陰に涼をとれば白き蝶の舞ふ日照りの中を

須 藤 紀 子 埼玉

太陽を恋ひて咲きたる向日葵が地の太陽となりて輝く
 通り雨の残せる小さき水溜り蜻蛉が卵産みて行きたり
 野苺の甘きを言ひて勧めても不審顔にて誰も食べない
 落蟬が最後の声を振り絞り不意の終はりに抗ひてをり
 いつまでも巢立たぬ雛を気にかけて朝夕寄り来る燕の若鳥
 若鳥も親鳥もみな集まりて燕の群れは旅立ちゆきぬ
 飛べぬまま命尽きたる子燕は庭の椿の下に埋めやる

佐藤靖子 東京

足もとに落ちてきて蜥蜴わが乗らむエレベーターに乗りてしまへり
エレベーター蜥蜴にとられ階段をおりに荷物ことさら重し
生まれたてらしきとかげの着地せる音ふき出しに大きく入れたし
脳細胞こはる音のプチプチと聞こえぬしのち衰へすむ
行く行かぬ行かないことのストレスが行くより大きな健康診断
いつも茶葉おくりくれにし兄なくて寂しみをれば一箱出で来
路線バスヘッドライトをつけ合ひてすれ違ひゆくいつものやうに
四次元のポケットもてるドラえもんさて今はやる二・五次元舞台

齋 鹿 ミヤコ 神奈川

こんにちとは声を掛ければ挨拶を返してくる女子小学生
こんにちのは挨拶交はしたる公園の小学生らは遠く手を振る
帰りゆく小学生らが手をふれば手を振り返す公園のベンチ
逃げてねと電話で話す二十センチの津波予報は三メートルに
友の地区は避難警告なければども近くの学校に避難したといふ
相模湾を幾度も廻るヘリコプター津波の被害なき日没前に
わが家は風強ければ難あれど津波浸水無きところなり
雨やめば友は雨雲画像みて庭の草木を剪定したり

江藤 ひさ子 大分

締め切りに後押しされて月々の作歌に励む吾の通常

拙くも欠詠丈は許さぬと吾に鞭打つその月々

盛り咲く丈の高低さるすべり丈の低きは独り生えにて
淡きピンクに今し満開のさるすべり大きく揺れつけふの終日
またもとて「ハワイ旅行のみやげよ」と長男からのコーヒー届く
長男の家族と旅せしコーヒー園の思ひ出手繰るコーヒーを手に
鹿児島島の豪雨の直後北部九州の豪雨を予報テレビに幾度
埼玉の長男、次男が次々に雨、大丈夫？と電話かけ来る

鈴木 計子 東京

久に聞く言葉と言はる隣席に素敵なお召物と言へるを
四人にて会ふ日の調整なりてその朝とり止む募る暑さに
熱中症案じくるる眼科医が二箇月分の処方箋呉る
御自由にどうぞとあれば有難くいただく箱の身割れキャベツを
今は保護さるる片栗ままごとの馳走にしにき幼き頃は
制服の前のお二人スカートの膝をせめて閉ぢて坐れよ
ひさびさにあそこでソフトクリームを食べむと出かく今日はコーラス
ファスナーが開いてゐますと背のリュック閉めてくるる若き女性が

石 渡 静 夫 茨城

体温を超える暑さの土用干し梅の色づくほんのわづかに
挨拶で短歌を引用石破首相三十一音復誦したり（広島平和祈念式典）
他と違ふことで差別を受ける身の苦しみいかに被爆者達は

「クスノキ」を小学生が合唱す九十九人の表現豊か（長崎平和祈念式典）
アンジェラスの二つの鐘は鳴り響く心澄ませよ世界の指導者

朝顔の赤紫の花開く白き花芯は妖精のごと

春先に剪定したるミモザの木枝先伸びて風とスキップ

献立を決めて買ひ物済ませれば思ひ出したる今日は丑の日

西村 邦子 兵庫

イタリア館抽選予約の難しく二時間待ちの列に並びぬ

人物に光と影のコントラストカラヴァッジョの「キリストの埋葬」

うす暗い展示室に漂ひぬカラヴァッジョの明暗の世界

旅をせし遠き国思ひ万博の大屋根リングに夫と眺む

夏空に白線引きて上昇すブルーインパルス拍手と歓声

初めての海外研修イギリスに旅立つ男の孫十五歳の夏

英国の時刻に戻して男の孫のキャンパスライフに思ひを馳せる

高橋 燿子 ☆ 埼玉

立秋を待ちて胡瓜の苗植える乾いた畑に水を含ませ

日よけて伸びゆく苗に添木する暑さに負けぬ胡瓜よ育て

早魃で実が太らぬと桃届く待ちいたる夫は二つめをかじる

福島へ行くことできぬと朗らかに電話の兄弟よく似る声で

熱中症警報が出て家こもり子等より健康確認電話

夜明け待ち一時間の畑仕事汗と疲れと満足感と

西瓜うりカボチャを届けに来た娘節約よりも命が大事と

沖縄のハイビスカスが赤く咲き記念の旅を思い出す庭

野崎 礼子 ☆ 埼玉

赤線の印が語る友の辞書知の深まりと歳月のあと

脳梗塞に倒れし友を思うとき笑みのスタンプそつと届きぬ

生きていた大丈夫ですと短き文梅雨の晴れ間に空澄みわたる

寂しいとつぶやく友の指先に冷めたコーヒーほろ苦きまま

雨上がり熱の静まりて地中より煙のごとく土の匂い立つ

空晴れて匂い漂うアスファルト携帯鳴りて梅雨明けを告ぐ

夏休み終わりの風に揺られつつふと甦る遠き日の声

満腹と嫌いなものを除けながら夫と孫は同じ言い訳

飯嶋 久子 ☆ 茨城

まず頭をとっさにかかえ背中より地面にどうとたたきつけられる

家までの五百歩ほどは必死なり娘の腕に倒れこみたり

レントゲンに骨折なしと告げられて帰る道々百日紅赫し

打ち身の痛さ遅れ出て来て家事すべて娘にまかせ横になり居り

一週間家にこもりて今朝の雨慈雨と書いてしみじみと見る

三人の娘に守らるる我が身をば至福と思う今さらながら

秋に向け県展二科展ひかえ居り娘の仕事忙しくなる

救急車団地に入り出でて行くこの頃日常茶飯事となる

八月号作品一評

小林 芳枝

湯船にて手足伸ばせる三、四分係は去りてゆつたりとをり 飯塚澄子
初めて入浴介助を受けられたのかもれない。最後に一人で上がり湯に漬かりながら少しずつ緊張が解れてゆく様子が感じられる。

銀竜草唐沢山に見つたり葉緑素持たぬ真白き姿 斉藤トミ子☆

別名をユウレイタケという銀竜草はツツジ科の腐生植物で湿り気の多い山地に生えるという。白くて茸のような変った植物のようで、下句にその姿が美しく表現されている。

児童らが作った小さき鯉のぼり商店街の空を泳げり 倉浪ゆみ

商店街の「七夕祭り」は私の子供のころからあったが見えない位の立派な鯉のぼりを下げて競っていた。児童達が作った鯉のぼりに心の温まるものを感じたのだろう。

昨年と同じことを思ってた西瓜作りは最後の年かと 松中賀代☆

自宅近くの畑で野菜作りを楽しんで居られるようで月々の歌からその様子を楽しませて戴いている。今年も美味しい西瓜ができたようだが先の事も心を過る。来年の今頃も西瓜を楽しみながら同じような事を思っているかもしれない。

第四クォーター残り〇・六秒に息を止めて勝つてと祈る 本郷歌子☆

「クォーター」とはバスケット等の時間区分の事らしく試合終盤の緊迫した状態が想像できる。応援されている地元チームへの強い願いが結句に籠る。幸いにも逆転勝ちだったようでほっとする。楽しみにしてゐた宿に母と行くゆつくり何からはなませうか 村上美江

大人になったからの母子の二人旅というのは中々できないものだが、それが叶った喜びがじわりと伝わる。下句の口語調が優しく響く。「行く」とあるので宿に向かっているのかもしれない。

庭の木に生れたる小さな蠟螂が女郎蜘蛛

蛛に絡まれてをり 稲津孝子

女郎蜘蛛の名の由来は艶やかな体の色彩からのようだだがハエや蚊などを食べるという。産まれたばかりの蠟螂が可哀想にも思われるが自然の営みである。リアルな描写から色々な事が想像される。

背振嶺かすむ施設の四階に遠き娘の躰調おもふ 三好規子

春の頃に横浜から福岡に移られたばかりである。自然豊かな場所のようで窓から背振山を見ることが出来るようだが離れてきた娘さんのことが心を離れない。

紐解きてひらけば木の箱木の蓋に納まるみやげのシウマイ弁当 齋鹿ミヤコ
連絡もなく息子が帰省したという歌が前にあるので息子さんのお土産なのだろう。弾むようなリズムが作者の嬉しさを伝えている。

ゆつたりと花や風景愛でながら夫と歩く川治いの道 高橋燿子☆

病院でのリハビリを終えて退院したご主人との散歩。何とも言えない幸福感が漂っている。

八月号作品一評

藤田 夏見

芯まるくなりたる鉛筆四、五本を削れば何か書きたくなりぬ 桜井美保子
いつも使っている鉛筆は芯が丸くなる都度まとめて削るのだろう。削り終えて尖った芯に何か書きたくなる。そうすると頷く人は多いのではないだろうか。

足指の間に入る洗ひ手の心ゆかしき指の動きよ 飯塚澄子

入浴サービスを受けられている作者の手が届かなくなつて来たわけではないが、足指の間を洗つてもらう時の洗ひ手を心ゆかしきと素敵な表現と思います。

意に染まぬ夫変えるは難しく我が変わりにゆく楽しみ求めて 斉藤トミ子☆

夫婦の間とは近くて遠い存在なのだ。長年連れ添つてわかつて欲しいと思つても簡単には行かない日もある。作者は楽しく生きるために、自分から歩み寄る方法に切り替えられている。

切り藁を敷きつめてやる土の上西瓜の

苗は好きに広がる 松中賀代☆

西瓜の苗の下に敷きつめた藁の上を蔓が伸びて、甘くて大きな西瓜の玉のあちこちに転がるだろう。「好きに広がる」の表現に読者も嬉しくなります。

草とりをしつつ安らふひとときの繁みに揺る雪の下の花 戸部田とくえ

四季折々の草木と会話をしながらの草取り作業なのだろう。日陰を好むユキノシタはどのような木陰で揺れているのだろうか、作者の草を取る時の安らう心。

沢沿ひを小滝に続く山道は人に会はぬが何より嬉し 須藤紀子

作者のテリトリリーにあるのだろうか。滝の音と風の音、清涼なマイナスイオンを感じる沢沿いの道。誰にも邪魔されずにわたしも歩いて見たいものです。

又もとて草に屈みつ満開のつつじを見むと出でたる庭に 江藤ひさ子

満開の躑躅。美しさに魅入る作者。色々な角度からの眺めは誰にも真似の出来ない特等席。草を取りながらの躑躅の見応えにひとりご満悦の作者が見えます。

松園に触れたる授業の後きたる生徒が私の曾祖母と言いき 鈴木計子

過去回想の歌。「序の舞」のことさら有名な上村松園の曾孫を生徒に持った奇遇。売るほどに米があるなら何故分けぬ大臣まさに特権階級 石渡静夫

世間を騒がせる大臣に国民は、又失望をしました。この人達はやはり特権階級なのだと思わずにおれない。教養など大臣には要らなくなったのだろうか。作者の怒りに同調。

軒下にナニワイバラの蔓が沿ひ陽ざしやはらぐ緑のカーテン 西村邦子
旺盛なナニワイバラは真夏にも白い花を咲かせ窓際の日差しを遮ってくれます。やわらかな緑のカーテンが嬉しい作者。優しさに触れやはらかなるころパスには乗らずゆうらり歩く

人はやはり人によつて一番癒されるものです。ひとつの微笑み、一つの言葉。そんな出会いにこそがほぐされる作者。ゆうらりと歩くに満足感を感じます。

中島千加子

人はやはり人によつて一番癒されるものです。ひとつの微笑み、一つの言葉。そんな出会いにこそがほぐされる作者。ゆうらりと歩くに満足感を感じます。

十月集

本間 志津子 山形

「おばあちゃん、年はいくつ」と知らぬ人年は言はぬといつもの返事
「了解」と去りゆく男「すまない」と詫びる若者人はそれぞれ
東北の梅雨入り宣言されしより雨の降らざる日日続きをり
地表より湧き上るかのこの熱気フェーン現象三十六度
隣家へ回覧板を届けては猫のギンタと遊んで帰る
何ゆゑといつまでを問ひたきこの晴れに雨の降らざる日日の続けば
水しぶき弧を描きつつ鳴子ダム放水さるる映像流る
ダムよりの水少しづつ流れる潤れてひび割れしるき苗代に
台風の九号さへも待ち遠し雨をもたらすものと思へば

川 俣 美治子☆ 栃木

昨年の暑さ越えたる午後の陽にとろけるごとき身を持て余す
この頃は些細な事にイライラす猛暑のせいとひとりつぶやく
冷房の涼しき部屋での午後三時熱い煎茶に和菓子のひとつ
夕餉あと庭に水やる夫の背に五十二年の月日进行
幹枯れて小さきままの西瓜採り仏壇に置く夏のしるしに

芝の中のとかげ見つけて近づけど背を光らせて逃ぐる素早く
猛暑日の青空仰ぎ携帯で予報を確認す出かける朝に

松 居 光子 三重

節電の呼びかけも今は影を潜めエアコンに頼る危険な暑さに
帰途につく頃にはじりじり照りつけて歩くは危険とタクシー呼びぬ
冷麦のつると喉を潤して暑さ忘るる昼食の時
わが身体ほぐされゆかむ珈琲のグラスの水触れ合ふ音に
手術終へ眼帯とれて眼開くれば目映きほどの明るき視界
モダンアートに似たる短歌の数多あり理解に苦しむ新聞歌壇

山 本 述 子 神奈川

早朝に低き旭日を背に浴びて長き影追ひウォーキングする
海岸の恒例花火無事上がり空を仰ぎぬ安堵の念で
小学生個性それぞれ寄り添ひて共に学びて楽しみてをり（夏休み教育支援）
盆なれど先祖の墓参叶はずに遠きに在りて手を合はすのみ
長崎の地をば被爆の最後にと今年も強く宣言さるる
脳トレの問題集に嵌まりゐて夜の更くるまで解き進めをり

植 松 千恵子☆ 静岡

あちこちの案内板に英語中国語ハングル語アジアの言語一つ覚えたし
スーパード「やばい」を使う老婆いてうまく使えぬ我は驚く
米農家ほどでもないが息子らは米に困らぬ暮らしに感謝

家に来た工事の人のブンブンと音する服は空調ベスト
朝はパン魚に館掛け夫の嘆き病院食は口に合わぬと
退院しゆっくり眠れる家が良し夫の悩みはひとまず解消

大野 茜 神奈川

緑道に整へられたる廃線跡地こぶしの並木白々続く
デパートにパン焼き上がる刻を待ち列なす人等スマホに見入る
MRIの画像を操作し先生は認知症にはならぬと振り向く
甘夏に溢れるばかりの花芽見ゆ春の到来喜ぶ如く
病棟に始発電車の走る音今日の手術に眠られぬ夜
ざつと降りすぐに止みたる梅雨の朝庭の緑の雫が光る
久し振りのバイパスドライブ二時間をハンドル握る両手は固く

永野 雅子 ☆ 東京

昼休み自転車転倒弟は左の手足に出血したり
負傷箇所手当後今晚仕事無理と弟小声で我に伝言来る
不注意で負傷し仕事出来ぬ彼に文句あれどもぐっと納める
週末まで休んで良いと言いたれど今日は水曜なり土曜は遠し
健康と怪我には注意と痛感し必死に鍋振る厨房のなか

松崎 みき子 岩手

盆前に義妹と行く墓掃除クマ鈴鳴らしつつ拭き掃きす
草刈り機のエンジンの音日焼けした夫が斜面刈る慣れた足取りで

熟したるブルーベリー摘み早々にジャムを作りて瓶詰め楽しむ
八月の空に黙祷す終戦から八十年義父の記録集開きて
南方の戦地も広し義父の居たジャンル何処か地図に探しぬ
天草を煮出して液を取る心太晴れた日の母の真剣な顔
盆支度張り切る母の水羊羹団扇の音が懐かしくなる

佐藤 幸子 山形

夏椿の葉叢は光を跳ね返しみんな蝉の声朝から響く
二時間半の朝仕事をへて食事後はテレビの音の中にまどろむ
蜂蜜に漬け込みたる黒大蒜スプーン一杯酷暑乗りきる滋養の塊
猛暑日の一日暮れて茜雲明日も暑いかなため息二つ
暴力絶えず言葉のみの核廃絶広島の叫び四海に届け
綱渡りの関税交渉の成り行きはあさな夕なにコロコロ変はる
一抱へのバジルを厨のサラダボールに活ければ真白き花の爽やか

津田 美知子 岩手

いそいそとおやつ買はんと夫と行く煎餅かりんとう甘納豆も
夫病みし日日のせはしき乗り越えしは子等の笑顔の励まし有りて
大震災に博多人形割れもせず五十余年を見守りくれたり
五十年余吾の独り言聞きくれし博多人形たをやかにして
悪しき事の子兆と言はるる鳥の声義母の訃の後びたりと聞こえず
亡き義母の漬けたる梅干し樽に有り食めば彼の日の姿浮かび来

残響集

立 石 節 子 ☆ 東京

紛争地子どもの瞳空疎なり未来を断たれ死の床にあり
地球滅ぼす核兵器平和日本のすぐそこにあり
父親を焼く前夜半目覚めたり母と叔母との口論激し
引揚げの竹の子生活支えくれ父亡き後の中国の人
イスラエル元兵士言う非戦論身近な別れ身につまされて
世界をば我がものとする指導者の核抑止力恐ろしきなり
今日の日に感謝感謝の思いありよくぞ生きたり八十五歳
我に言う転ばぬように歩めよとふらつく足に気をつけて

井 出 裕 子 静岡

パーキンソン病の友はステッキ使ひこなし我より巧みに急坂登る
ままならぬ病む身を嘆かぬ友は元陸上競技のエースなり
下山後の次なる計画楽し気に話す友の目清々しかり
病持つ友のこれまでに重ねきたる苦悩を思ふ笑顔を見れば
消去法で事を決めたる日キッチンで答はひとつの数独を愉しむ

高 藤 朱 美 ☆ 茨城

眩しさに気づきて朝の空みれば真赤に染まる鱗雲見ゆ

二日程涼しい日あると予報あり花がら摘みつつ庭を行き来す
散水時ピンクと白の花のあり寄り添いて吾を癒すバラ達
血糖値の上昇抑える朝納豆薬のような食事味良し
できたての梅干し姉から届きたりひとつ摘めば塩梅の良き
上着無く画面に映るガンディーの非暴力説く思想に聞き入る

河原木 光 子 ☆ 広島

正月に家族写真を撮りたりと姑^{はは}の日記読み若き日うかぶ
和装にて舅姑並び立つこの家に住みて二度目の春に
年末につきたる餅はお供えと家族七人の雑煮になりて
折り目あるズボンをはきて颯爽と媼は参加すラジオ体操
AIにて九十代のわれに会う希望わきくる大阪万博
万博の駱駝のミルクはほの甘しサウジアラビアの砂丘を思えり
その歌詞は胸に應えて歌い得ずアンジェラ・アキの「十五の春」は
様々な言語が聞こえ乗りて来る原爆ドーム前の電停

手 賀 稔 子 ☆ メルボルン

柔らかなレタスの葉陰のてんとう虫ためらいがちに指先のぼる
いわし雲大群となり泳ぎ出す行方に満月のぼりはじめて
食卓の花に差しくる陽の角度次第に変わり日々春めきぬ
あさみどりエンドウの芽の風に揺れふるふる伝ふる春のいぶきを
水盤の水まき散らし戯るる二羽のロビンの羽光る午後

『比喩の短歌コレクション 1000』

紹介

桜井美保子



好評の「短歌コレクションシリーズ」に、このたび「比喩」をテーマとした一冊が加わった。本書は「短歌における比喩法」という内容で編集されていて、比喩の技法に秀でた作品が集められている。比喩にはどんな種類があるのだろうか。本書の解説を紹介しながら、集められた作品の一部を見ていきたい。

◇直喩

「～のごとき」「～のような」などの直接的な表現で例える方法。鑑賞していても割合分かりやすい。思いがけない直喩に驚きつつも、鑑賞した時に作品の味わいが深くなっていることに気づく。

若鮎の群れつつその身をひるがへす刃に
まがふかたち光りて 鶴見輝子

鋭敏な動きを見せる若鮎の姿は刃のように

いハガキである。

着れば暑く脱げば寒くてカーディガン傍
らに置き机に過ぐす 大山敏夫

注には「机に過ぐす」は机の前に座っていることの換喩とある。微妙な気温の変化に自らを労わりながらながら「冬雷」の編集作業にあたっているのかもしれない。

◇提喩

上位概念を下位概念で、または下位概念を上位概念で表す技法。何やら難しいが要は「石」（全体）で「宝石」（部分）を表し、また「ごはん」（部分）で「食事」（全体）を表すような方法だ。

はろばろと打ち寄せられし韓国語 静間
の浜に日を浴びてある 弘井文子

「韓国語」が提喩になっている。「韓国から日本にたどり着いた海洋ゴミ」と注があるが、一、二句で明らかである。それらは大海原を渡って日本の浜まで来たのである。

◇転喩

ある物事を直接には言わずに、それに先行する物事をもって後続する物事を表す。またはその逆を表す技法。具体例では「涙」で「嘆き」「悲しみ」を表し、「ユニホームを脱ぐ」で「引退する」を表す。婉曲表現。

ある。一瞬、跳ねるように方向転換。「光りて」「刃」という言葉を引き寄せる。

森の上にとどまる雲が繰返し放つ稲妻投網のごとし 大山敏夫

稲妻の走る様子が目に浮かぶ。まるでこの雲に雷神がいるみたいだ。次々と投網を打つように稲妻を繰り出す。危うし、作者。

五線紙にのりさうだなど聞いてゐる遠い
電話に弾むきみの声 小野茂樹

受話器から愛する人の声を快く聴いている。その朗らかな声は音楽を思わせる。五線紙を連想したのだろう。若く新鮮な感覚だ。

「お母さん」と迷路のごときスーパード
い母探す 迷子のように 河路由佳

大型スーパーで売場の配置がつかみ切れない場合、迷路のようでもごつく。どこかで、はぐれてしまった母を探す。「迷子のように」は自分なのだ。幼かった昔が重なってくる。どこか切ない感じがする歌だ。

◇隠喩（暗喩）

「～のごとき」「～のような」などの表現を使わずに、あるもの（主意）を別のもの（媒体）との類似性（根拠）によつて例える技法。本書にはこう書いてあるが、簡単に言ってみれば、対象となるものの特徴を直に他のもの

で表現する方法を言う。ただの一語に還元された直喩とも言える。

花はおほむねをみなにあればまぶしみてあふぎみるときをのこのころ 大山敏夫

花は女のようなであるというところを「花はをみな」と表現すると、直接的に強く読者の胸に響いてくる。憧れのような感覚があり「のこのころ」がびたつと収まっている。

箆筒ひらき着物 形見分けをせりどの色
もどの色も祖母なり 梶原さい子

着物を着ていた頃の祖母を思い出している。形見分けをしながら広げるさまざまな色の着物。どの色にも祖母の面影がある。慕わしさと寂しさが入り混じった感情がある。

◇換喩

何かを表現するとき、その対象を、その事柄と隣接しているものや、深く関係しているもので置き換える技法で例えば「色の白い少女」を「白雪姫」としたり、「お銚子」で「酒」を「暖簾」で「店」を表したりする。

「モーツァルトに行きませんか」 太夫と書かれしハガキ父より届く 飯沼鮎子

この歌には、モーツァルトの楽曲が演奏されるコンサートを「モーツァルト」と換喩しているとの編集部の注がある。父からの嬉し

と、この湖の冬の姿を想像できない。まさに「水が襲う」恐ろしく厳しい気象となるのだから。活喩が効果的に使われている。

◇諷喩

例えだけを示し、例えられているものが何かを推測させる技法。

青苗の涼しき並び伏せて一度に落つる天の溜め水 さいかち真

注に「天の溜め水」は驟雨を表した諷喩とある。整然と並んでいた苗を叩きのめすような激しい雨。長く降らずにいたなら、この溜め水は有難いが降りすぎても恐ろしい。自然を敬い恐れる心を忘れてはならないと思う。

手に結ぶ水にやどれる月影のあるかなき
かの世にこそありけれ 紀貫之
手にすくった水に映る月の姿は手から水がこぼれれば消えてしまう。その輝きは一瞬のもの。定かでないこの世を生ききてきた人間の儚さを諷喩した歌。辞世の歌とある。

本書には比喩で表現された優れた歌が宝石のように散りばめられている。じっくり読んでその表現を楽しめば、思いがけない発見や驚きがあつて、作品が持つ豊かな味わいに気づかされることだろう。

（日本短歌総研編著・飯塚書店刊）

八月号作品二評

井上 萱子

待つという心の大事「スカシユリ」膨らむ蒼朝ごと眺む 児玉孝子☆
「膨らむ蒼朝ごと眺む」には、すぐにも咲いてほしい期待と願望があるが、その心を抑えて自らに言い聞かすような上の句で、調和のとれた心情を詠む。

暮れ方の床の間占めて大壺は肩の辺りに油薬の影 小林貞子

暗みがかった床の間のひとつ「肩の辺り」という細部の発見、「油薬の影」の微妙な捉え方に独自の感性がある。

有難や八十余年一日も米食べぬ日の無くて過ぎたり 山本述子

八十余年飢えた日の一日も無かったことを、文字で感謝を表す。当り前のように食べてきたことも短歌では形となる。

先生は風の如くに来て去って何を言ったか聞こえぬ私 安川敏子☆

「病院にて」と題があったので、回診の様子だろう。「風の如くに来て去って」

は、医師の多忙な様子をうまく表した。下の句は患者の悲痛な声である。

ジャイアンツの長嶋選手亡くなりて彼の地の夫に報告をする 加藤富子☆

彼の地の夫は「長嶋」のファンだったのだろう。生前と同じように日常の会話をすることは、夫を亡くした人には共感でき、「長嶋」の具体が生きている。

郵便を投函せむとコンビニへ行けばポストは撤去されをり 松居光子
コンビニの開店や閉店は知らぬ間に行われていることが多い。競争の激しい業種の実情が浮彫に詠まれた。

若き日に酒酌み交わししことありき後輩の死を新聞に見る 藤田英輔☆

私の住む地方紙にも「おくやみ欄」というのがある。無音の人の死を知る機会でもあるが、ここでは酒を酌み交わした後輩を懐かしんでいる様子を想像する。

卒寿を期に紅花を蒔きて育てたり紅餅つくりを試し楽しむ 水澤タカ子

紅餅は紅花染めの一つの行程。卒寿になって新しいことに挑戦する。その意欲

に敬意を表したい。

病院の面会規制続きみて目の前の母の手握りてやれず 津田美知子

コロナ以降面会の規制は解かれない。リモートかガラス越しか、目の前に居ながら手も握れないもどかしさが胸を打つ。八十年代最後の春の豊けしを父も母も知らずに逝きぬ 奥山清子

父母は八十前に亡くなり、作者は今八十年代最後を豊かに平和に生きている。この幸せを知らずに逝ったのだなあ、という詠嘆。

煌めく水平線をたまに見る若い父が居た夏の港で 松崎みき子

漁業関係の父だったのか。若い父、夏の港、煌めく水平線、輝かしい言葉の裏には父の不在を際立たせて切ない。

茄子苗を植ゑて手袋外すとき指すり抜ける五月の風が 佐藤幸子

土をいじる作業だからゴム手袋だろう。手袋の中は蒸れて不快である。茄子苗を植え終えた安堵感と、手袋を脱いだ爽快感を表す下の句。五月の風が光る。

八月号作品二評

江波戸愛子

救急車近くに止まり出で見れば義妹の家なり驚きゆきぬ 児玉孝子☆

救急車の音が近くで止まればどこのかと心配して外に出る人は多い、下の句に義妹の家と知り驚き向かう作者の姿がみえるようです。

庭の梅息子にたのみ収穫し吾は塩漬け夫は甘味噌漬け作る 卯嶋貴子☆

庭の梅は息子さんが収穫し、その実をご夫婦で別の味に仕上げるという、家族が協力してできる梅の味はかくべつな美味しさなのだろう。出来上がりを楽しみに待つご家族の姿がうかぶ。

「明日行くよ買物あれば」 いえ吾子よ溜まりゐる筈のタッパーでよい 小林貞子

一読しておもわず頬が緩んだ。親子関係のよさがよくわかる。来るたびに作者の手づくりの料理などを貰って帰るのだからタッパーに詰めて。

遠方より夫の友人泊りに来るこれをチャンスにと家磨きあぐ 植松千恵子

普段からやらなければと思いながらなかなかできないことがある、ご主人の友人が泊りに来ることで詠んだ一首、家磨きあぐに普段とは違う意気込みがあり、達成感が伝わる。

ジャイアンツの長嶋選手亡くなりて彼の地の夫に報告をする 加藤富子☆

長嶋選手ファンだったご主人に亡くなったことを報告しながら、テレビの前でみていたご主人の声を懐かしく想い出されたのではないだろうか。

郵便を投函せむとコンビニへ行けばポストは撤去されをり 松居光子

今はほとんどの人が携帯電話を持っているのでメールや電話の使用でポスト投函は少なくなったようだ。そして回収の回数も減っているのを最近知った。

ヒヨドリが戸袋の中に巣を作り開け閉め出来ずときどき覗く 谷田律子☆
人の近くにいるヒヨドリだが戸袋の中に巣を作ることもあるらしい。その巣を

見守るまなざしが優しい。

母逝きて早二十年わが齢あの日之母に近づきており 小嶋知葉☆

母親の亡くなった歳に近づいてきてはじめてその母のおもいが判ることがある。亡くなった母への想いを詠む。

松の枝ドウダンツツジ梅の木も擦れつつ隣家との付き合ひ良好 津田美知子

普段からお隣りを大切にして来たのが下の句によく判る。姑が両隣の方とよくお茶飲みをしていたことを思い出した。

八十年代最後の春を惜しみつつ夫と踊りぬ「最上川慕情」 奥山清子

同じ趣味を持ち毎日お二人で踊る楽しさを詠んで読むほうも楽しくなる。踊りは若さを保つ秘訣のようだ。

茄子苗を植ゑて手袋外すとき指すり抜ける五月の風が 佐藤幸子

手袋をして茄子苗を植ゑてゆく作業は五月、汗をふきながらの作業だろうか、ようやく茄子苗を植え終えて手袋を外したときの爽快感を柔らかく詠んでいる。

八月号作品三評

山本 三男

諦めず粘るも苦し さりとても引くに引かれず立ち往生す 立石節子☆

この歌は苦しんでいる事柄に対する具体的な内容は詠まれていませんが、うめくような表現からその苦しさが伝わってきます。止むに止まらず作られた作品なのでしょう。

半日の区民の集ふ行事終へ程よき疲れに午睡に落ちぬ 井出裕子

一連の区民体育祭に関連する作品の最後の歌です。この歌では行事に参加した満足感が伝わってきます。程よき疲れという表現にそれが感じられます。

今日もまた予定通りに過ごせたと食器を洗う手元が弾む 首藤文江☆

食器を洗うの一日のしめくくりのような作業ですが、手元が弾むという表現で満ち足りた思いが伝わってきます。毎日を送るに過ぎないというのは、それなりの努力のたまものでしょう。

八月号作品三評

橘 美千代

ひばりの歌我が好むは「佐渡情話」マリア・カラスもこうは唄えぬ 新井光雄☆

筆者の世代は美空ひばりの歌を聴き味わうには幼な過ぎた。「佐渡情話」をYou Tubeで聞いてみた。伸びやかで艶があつて本当に良い声だ。オペラ界の女王マリア・カラスの声も艶っぽいメゾソプラノだった。カルメンのハバネラを歌う時など特に。このカラスに優る歌唱とまで言い切る作者の入れ込み様は。

友を見舞いコロナ禍の中会えざりし暮れにわれひとり言のみ 立石節子☆

コロナ禍では、病院は感染対策のため面会を禁止した。ワクチンもまだ無かった頃は止むを得まい。タブレットで面会したりもあった。死に目に遭えなかった方、家族の元に遺骨になって戻った方など多々あったようだ。友に会えなかった口惜しさを個性的に歌い印象深い。

子供の日早朝に見るスカイツリー孫の結婚式までの車窓を楽しむ 高藤朱美☆

電車から見ている景色でしょうか。お孫さんの結婚式に参列するために都心へ移動し、その景色を楽しんでいます。子供の日の頃は気候もよく、結婚式の晴れやかさを予感させる歌です。

一途なる久女の一世を学び読む田辺聖子の『花衣ぬぐやまつわる…』

後藤恭介☆

この歌の学び読むという表現に、作者の熱心な学習意欲を感じました。田辺聖子のこの著書は杉田久女のそれまでのイメージを払拭するための労作です。筆者には久女の一途さは、とても真似ができません。

早朝の鳥の囀り遅しく何も憂うなど我を励ます 永井享子☆

作者には何らかの憂いがあったようです。早朝の鳥の囀りを聞いてその声を遅しいと感じています。自分自身を励ましている歌でしょう。

吾妻山の山影映える水張田に春風そよぎさなみ立てり 長谷川 剛

田植えのために水を張った田に吾妻山が映る美しい景色を描いています。その水面にささなみが立っていて山影も少し揺れながら映っているのでしょうか。この時期でなければ見られない光景を巧みに表現しています。

細波を夕陽が染める日本海喜寿の私の夏が過ぎゆく 松田忠一☆

上の句では夕陽に染まった日本海の細波が見事に捉えられています。こういう美しい景色を見ていて、ふと浮かんだものの悲しさを感じさせる歌です。

弟の無き家ひとり守り居る義妹に持ちゆく筈を掘る 児珠純子

筈を掘るのはコツがいりますが、この作者は掘るのに慣れているようです。作者の実家は今は義理の妹さんがひとりです。住んでいるようですが、その妹さんの喜ぶ顔を想像しながら筈を掘っているのでしょう。筈を掘る作者の力強さを感じられる歌です。

外知らず中で育ちたる猫たちは外に放てどすぐ戻り来る 羽田孝輝

家の外に出ることのない猫は、外に出た途端あまりの情報過多に圧倒されてすぐでしまわらしい。居なくなったりせずすぐ戻って来るとは感心な猫達だ。

肉そばを自信に満ちて勧めらるこれはたまらん汁まで飲み干す 金子八重子☆

自信をもって勧められる本当に美味しい肉そばだったのだらう。読む方も思わず唾がわいて食べたくなる。作者の飾らない本音が下の句に勢いを与えて。

強風にネットに確としがみつくりうりの苗の細き巻きひげ 長谷川 剛

強風に吹き飛ばされぬようネットにしっかりと巻き付く様に胡瓜の苗の生命力が表現される。何とも言えずいいらしい。早朝に畑耕すこのとしも腰をかがめて土と向き合う 長澤千恵子☆

農業に勤しむ人の誠実さが一首全体に現れている。人間は土に触れると元気になるそうだ。確かに、ひどく落ち込んだ

時、花を植えていて心が慰められた覚えがある。夜明けとともに畑に向かい、腰をかがめて土を耕す姿の尊さ。

春雨が地を潤せば花咲きて草も勢ひ手を煩はす 今野澄子

春が来て、雨の降るたびに土も潤い木も草も勢いを増しゆく。その勢いが歌の調子に溢れている。雑草刈りも花をつけ穂を出す前にしてしまわないと面倒になる。煩わしいと言いつつも夏へ繁栄の時へと向かう前の昂りが垣間見える。

筆筈にも下駄にもなれず桐の木は薄紫の花を立たせる 児珠純子

桐の花といえば北原白秋の第一歌集『桐の花』が浮かぶ。「短歌は一個の小さな緑の古宝玉である」のあの序文の。以前勤めた県立病院の職員駐車場の隅に桐の木があった。歌を詠みはじめてからは注目する様になった。爽やかだが色の薄い地味な花と思った。あたかも桐の木に成り変わったかのように嘆息する上の句が詩情を醸す。花の特徴を写生する下の句により全体のバランスがとられて。

作品二

小林 芳枝 東京

北と南の窓開け放し午前四時エアコンと扇風機休ませてゐる
ひとつづつ越えてきたれる年の数八十一段目を踏まむとす
そんなものだと思つてみたらと医師は言ふことしの夏の体のだるさ
エアコンの設定温度ひとつ上げ扇風機弱の風をたのしむ
A4がB4サイズになりて出るコピー用紙のほかに温し
コンビニの午後のコピー機独占しうろつきながら見張りしてゐる
四枚の大会詠草コピーして四百枚を抱へて帰る
あつさりと雷雨過ぎたるゆふぐれの湿気のなかを行くポストまで

小林 貞子 山形

絹糸が茶に色づきてたうきびの列なす幹の実の太りくる
線路越え国道横切り猿軍団町の中にも出没と聞く
防鳥網を掛けて井戸水日日遣りしハニーコーンの影の無き朝
飛び越えも潜りも出来ぬ電気柵幾重も張れば猿は来ぬかも
指ほどの小き胡瓜は皆曲がり皮ぼこぼこの椿虫被害
物言へぬ義姉に冷たき桃の汁いかかと問へば微か頷く
ペランダに洋卓と椅子持ちだして夫と息子の花火の宴

大花火向かひの川原より上がる闇の中での花火師思ふ
西空に大輪重ね花火咲く南の望月澄みて黙有り

梶 尾 栄子 兵庫

水張田に寄せるさざ波見て飽きず共に揺れゐる心地のしつ
手の甲を蜂に刺されて忽ちにグローブ付けたるごとく腫れたり
もうこれが最後になるかと思ひつつ姉と連れ立つ一泊旅行
こんなにも饒舌なりしや一人暮らす姉は湯宿に話し止まざり
「なめるな」と口を極めて言ひ放つ一国の首相の言葉と思へず
亡くなりて初めて父のこと知りたりと初盆のお下がり持ち来て息子は
己が年考へけふは休めよと夏ばての身に言はれ従ふ
知らぬ間にフロントガラスに落とさるる糞を載せたるままに走りぬ

児 玉 孝 子 ☆ 愛知

右足の痛み激しく診察を受ければ医師は即入院と言う
即入院という予期せぬ結果に連れ添う娘慌しくも準備手際よし
看護師は入れ歯さし歯を確かめて無いと答えれば驚きくれる
モニターを置かれ生生しき医師の声工作する如く手術はじまる
骨密度よくすると飲みいし錠剤の合わずに吾が骨こわしたるらし
手術の後に当り前は一つもなし介助得て済むやつの排泄
療法師に術後三日目痛む足ベッドにあずけて少し安らぐ
療法師のリハビリ受けて歩行器に捉まり歩く術後七日目

抜糸する主治医の回診手術あと良しと言われて気が楽になる

東 ミチ 青森

賜ひたる『短歌コレクション』読み返し付箋だらけの本になる

日の陰る時間を待ちてホースより庭の草花に水やる今日も

待ちゐたる雨が激しく窓たたき篤農家である甥の顔浮かぶ

種を蒔き育てし朴の木スクスクと伸びて豊かなる大きな葉揺らす

盂蘭盆の間近になれば仏壇の埃を払ふ如来さまに告げて

川 上 美智子☆ 高知

蝉しぐれ激しさ増してボリュウムを上げて見ている朝ドラ「あんぱん」

土佐弁を見事に使う「あんぱん」の会話に浮かべる在りし日の祖父母

気に入りのパンツの膝の小さき穴に布充てて繕う祖母偲びつつ

早起きの祖母でありしが時折りに眠たき祖父との諍いありき

暑いから外出は嫌と言う友が行くと即答す映画「国宝」

友も吾も映像の世界に引き込まれ現つを抜かす三時間

大量の紫蘇の葉抱え友来たりジュースにせよと言う俄に忙し

紫蘇ジュースは甘さを控え出来立ての清しき赤を友等に届けん

藤 田 夏 見☆ 広島

飛沫あげ六年生ら競いゆき深みに待ちやる三年生を

川底の石を返せる少年の手に蠢けるコオニヤンマは

笹舟の浅瀬をめぐり風に乗り流れてゆくを少女と見てる

三つ四つ飛び跳ねおりぬ石切に小石選べる女男の孫らは

小石飛ぶイメージはある老年のわたしの放つ石切りドボン

三人の孫の歓声天神峡木陰のせせらぎ温きぞ真昼

土手道の大木の枝は葉裏見せ川面の耀い映して揺れる

筆簾と鼓の調べひねもすに神楽の里の天神峡は

加 藤 富 子☆ 栃木

例年の妹家族との旅行先鹿児島移住の姪の住宅

串木野生まれのゾノ君は姪のつれあいにてガイド兼ドライバー

鹿児島県は全国三位の温泉地今日は山の湯明日は海の湯

指宿の砂むし風呂は娘の希望暑さにめげず砂に埋もる

唐船峡初めて聞きたる地名なり流しそうめん発祥の地

ゾノ君の作る肉味噌絶品で今朝の食事の主役となりぬ

卯 嶋 貴 子☆ 東京

夜九時に消灯する宿から外に出れば天の川が美しく見える

消灯の後に従業員何人かくらやみの中風呂に入りおり

山小屋の窓から見える雪倉山は八月初旬に雪を被りぬ

天狗の庭までの登りに大池山荘めざして小学生の一行がくる

安 川 敏 子☆ 埼玉

テレビに見ているだけの清流の映像と音にひととき癒さる

わさび田の濁りなきよう祠あり澄んだ流れは先人からの祈り

初桃は香りも甘く姿よく皮ごと食べよと送られて来る
病院の待合室は変らずに静かにひたすら順を待つ人
熱中症に塩をひとふり塩バナナ マラソン選手もへたらず走る
暑い日にカレーの香り風に乗り賑わい浮かぶ家族の夕餉
朝食は冷たいスイカ真っ先に食欲が出て焼肉も美味い

谷 田 律 子 ☆ 栃木

雑草に埋もれた中で咲いているカサブランカのたくましく白
今更に母の生き方たくましく思えば齢は母を越えたり
伸び放題今年の夏は雨もなく雑草までも枯れてくる程
小鳥達は桜の葉陰に身をひそめ雨降りを待つ猛暑の中で
アリ達がセミの死骸を運び行く七日ばかりのはかなき命を
赤トンボ物干し棹に並んで止まりおだやかになる今年の秋は
近寄ればすべての蟬は鳴きやんで油蟬一ぴき逃げず動かず

藤 田 英 輔 ☆ 高知

「面会の予定は、中止となりました。コロナが又・・・」と病院の声
同窓生の俯き歩く背中には七十年の月日の重み
ベランダの陽除けの網の隙間から犬覗き待つ幼の姿
柔らかき色の雨ぐつ選り持ち幼は笑う雲厚き朝
甘とうを手を伸ばしもぐその先に母児の通う国道のあり

小 嶋 知 葉 ☆ 茨城

広島の平和記念式典の首相あいさつ胸にせまれり
追悼の結びに短歌よみあげる首相の声に万感こもる
今年また心をこめて歌います「三度許すまじ原爆を」
真実がわからぬままに投票する選挙の怖さ今更に知る
四キロの梅干づくり完成す塩分一〇%の味となりて
三日間炎天下に干し夜干しまで先人の教え今も続くなり

野 口 秀 子 山形

もう幾年もつかも考へず備へ付けす30年前のエアコン取り換へ
朝の庭を観察すれば藤の枝は四方に伸びて鋏を入れる
庭芝の茶色に変はるを如雨露にて二杯水遣る夕暮れ時に
伽羅の木にできたる蜂の巣にシューシューと消毒液を掛けて除去す
涼やかな朝の庭に水色の小さき朝顔数多咲きつぐ

同窓会報に見る美しい筆文字の追悼の言葉を直ぐに読みたる
戦後八十年特別企画直筆の全文 学徒動員と尊い犠牲 三ページに渡る

水 澤 タカ子 山形

染色家の大山氏よりの種蒔けば紅花今をあざやかに咲き
紅花の若菜の煮物もうまかりきわれも試しぬ貫津を思ひ
紅の色の濃くなる花を早起きし摘みて洗へり古きふごにて
摘み遅れの花は良く揉み紅餅にあとの乱花は寒天に入れん
紅花とかかはる数多の市町村は日本農業遺産に指定さる

最上川を通し京阪へ運ばれき高値のつけば豪商生れき
女の孫と山形市内の紅の蔵に繁盛したりし模型図見めぐる

井 上 鈴 子 山形

梅雨時の生家の薔薇を恋ひたれば夫植ゑくれしばらは四季咲き

「国宝」の映画に見たる歌舞伎の舞つぎつぎ浮かび眠れずにある

暑さ続き熱中症の恐れありて兎らの登下校スクールバスになる

「古代エジプト展」にいそいそと行く暑き今日館内涼し気温のみにあらず

アイシャドーも小さき指輪もわれわれと通ずるころ古代エジプト

仄暗き部屋にひっそり眠りたるミイラの少女復活待つらむ

紫のわが家の畑の茄子のあれど子の買ひきたる濃き式部なす

七ヶ宿に孫と行く兄の持ちゐたる常には飲まぬコーラのボトル

奥 山 清 子 山形

豪雪の雪解水を吸ひたるや花数多き西洋石楠花

やうやくに昇格なりて嬉しかり山崎英子様目差し励まむ

七夕に入籍すると言ふ孫娘機を織らずにサックスを吹く

庭の竹伐りて七夕飾りたり嫁ぐ孫娘の幸せ祈りて

初生りの獅子唐十本胡瓜五本優しき姑に供へて感謝す

生ひ茂る草に負けじと立葵高々と伸び青天に咲く

鳥の害処理済みといふ赤大豆一穴三つ丁寧に蒔く

ラップしてレンジで五分老い二人三時の御八つ玉蜀黍で

玉城洋子歌集

『炎昼』を読む

小林 芳枝

炎昼の島を揺るがす「ヘリ墜落」人もメ
ディアも抗議の渦に

歌集のタイトルになった歌。「炎昼」は俳句の季語で「真夏の昼間」という意味のようである。「マフックワ」とルビが付いているのは沖縄の読み方なのだろう。この歌集は昭和十九年に沖縄で生まれ国語教師として多くの高校生を育てて来られた玉城洋子さんの第八歌集である。1982年に第一歌集『紅い潮』を刊行し「くれない短歌会」を結成。月刊誌『くれない』は現在二百七十八号になっている。夫君の協力もあると伺っているが行動力旺盛な方である。沖縄からの米軍基地全面撤退を願い、座り込みをして抗議する玉城さんは基地を撤去して平和に暮らしたいという強い願いをもって活動されてきた。しかし終戦から八十年を過ぎても基地は無くならず辺野古へ移転することになった。六章の中から一首ずつ抄出してみたい。

辺野古の海山を死守する人らに会はむ黒

糖持ちて高速に乗る

I 章

辺野古移転を阻止しようする人達に黒糖を届けて元気づけようという。思いだけでなく共に座り込みをする意気込みも感じられる。

島人が唄ふ青き辺野古の海 武器などい
らぬ基地などいらぬ

II 章

この穏やかな海を壊さない欲しいという願いが悲しく響く。下句は島に住む人達の心からの願いであろう。

ウミガメよジュゴンよ優しき人らが守る
辺野古の海は君のふるさと

III 章

まだ基地にすると話のない頃に案内してくれた辺野古の穏やかな海を思い出す。静かな砂浜から見た海は此処にジュゴンが居るのかと思うだけで心の静まるような人江だった。優しく語り掛けるこの歌が心に沁みる。

座り込む私の背後は弾薬庫オスブレイブ
ロペラ上げて降り来る

IV 章

座り込みをしている自分に向かってくるように降下するオスブレイを弾薬庫を背にして見ている。オスブレイを含めて訓練機墜落の恐怖は常にある。

「普天間」を巡る日頭痛む目を庭に移せばランタナの満つ
花に癒されているのかと思ったけれどそう

ではないかもしれない。ランタナには七変化という名があり侵略種とされているようだ。

島人の悲しみ紡ぎ「イクサーナラン・イクサーナラン」と言ひて歩みぬ

VI 章

この歌集の最後の歌。基地撤去の希望もなくなつて先のみえない現実がカタカナ表記で悲しく響く。

観光地というイメージのある沖縄であるが現実とはとても厳しく、身近に外国の基地のある苦しみを知って貰いたいと願う玉城さんの戦いはまだ続く。何時か日本が戦争に加わるようなことがあれば彼の日に戻るのではないかという不安を籠めて詠む玉城さんの歌には破調も多くある。歌の形を整えることより変わらない現状に向ける怒りを真っ直ぐに伝えたいという気持の方が遙かに強いのだ。沖縄から米軍基地をなくし、辺野古を元に戻して戦争への不安を一掃する為に全力で戦ってきた信念を今後も仲間と一緒に持ち続けたいという決意は強い。

うつすらと桜咲きしと伝へ来る北に嫁ぎし従姉妹の京子

身内を詠んだ歌はこの一首のみ。自分にも厳しい玉城さんが時には従姉妹さんと花を見て楽しんで頂きたい。

■交流他誌に学ぶ・・・〔編集室〕

◆「新アララギ」2025年8月号

明るい紫のベタの上に「新アララギ」とゴシック体で記すシンブルな表紙。そこには万葉集巻十四、三三四八番の上総国の歌一首、

夏麻引く海上渦の沖つ洲に船はとどめむさ夜ふけにけり

を上品に配置している。これについては98頁に代表の雁部貞夫氏が「表紙デザインについて」と題し丁寧に解説する。土屋文明の言葉、「東歌はみな面白い。しかし、いちいちの作品を精査すれば出来、不出来があり、そこは弁えておくべきだ」をあげつつ、「古代東国の歴史的な変遷、地理、地名への関心を深めて行くと、そこには豊かな『知』の世界が広がっている。」というものの。

巻頭の「八月集一」のトップにはその雁部貞夫氏の作品六首。

入院七日目病院食に慣れたるか「ハーフ軟食」われ完食す
寝られぬ今宵はしきりに思はるる吾が魂の落ちつく先を

ご入院中の模様である。ベッドの上で、歌の友らが吟行会か何かで松戸の徳川別邸に在ることを思う歌を最初に置き、病院での介護を受けるフィリピン人の若者との交流もさりげなく歌う。そして取り上げた二首。完食の結句から容体は快癒へ向かっているようだ。「ハーフ軟食」の具体性も理解しやすく力強い。二首目の病院のベッドの日々を率直に歌う姿勢が生かされて、結句の「魂の落ちつく先」が重く響く。単に安らぐ時を言うのか、もともとずっと先の世界を指すのか。

続いて萩原千也氏の日常詠六首がある。

一時間ほどの歩みに腰の負担感ずる日あり犬死してより
後手を組みて歩めば腰骨と背骨まじはる辺りわらぐ

愛犬を失ってから自身も急に老が進んだと感じ、その腰の負担も、二首目では対応している。しかし医学用語に「腰骨」は無いようなので、背骨と交わる辺りがどこなのか？ 迷うが、骨盤の内側お尻の割れ目辺りの尾骨（骨盤の一部になっている）、仙骨（実際には、ここから背骨は始まる）から腰椎に繋がる辺かもしれない。具体的であるようで、要領を得ない表現に見えるので、「腰骨」ではなく直接的に「骨盤」とする方が良さそうだ。三首目を読むと、犬の名はコロだったとあり、さらに猫を飼っているようで、名がミケだと知ると、つくづく庶民的で典型的な名前を付けるのだと親しみの湧く。もっともその人柄が濃く出ているのは最後の歌だろう。

始めればついのめり込む手職われ止める時刻を決め取りかかる
重鎮、丸茂伊一氏の五首も一筋通るものがある。

「アララギ」の分裂したる経過など知れば悲しき残念無念
「アララギ」が分裂し再出発の「新アララギ」を頼りわが歌つ
づけ来たり

主義主張は様々だが、雑誌が在れば歌は継続できる。
粒揃いの六首の駒沢信子氏が良い。

池に溺れたまた崖より墜落し今にながらふ運の良きわれ
新緑のかがやき空に返しつつ葉のもりあがる山のかへでは
簡単に言えば運が良い、なのだろうが人生はそれほど単純ではない。
〈解き難き一つ疑問をひきずりて五十余年の時がすぎたり〉の歌もあるように、何事も複雑奇怪なもの。「山のかへで」の歌には、自然を観る眼力と、写実の歌の力感を示す。

第二八巻第八号、通巻三三二号。作品欄頁68。内部作品批評欄12。
外部作品批評欄、評論、歌集紹介、作品研究合評など読み物も豊富。
A5判本文一〇〇頁の洗練された編集である。

◆創業1948年、詩歌と共に77年！ 伝統と信頼の飯塚書店が出版する短歌関連書◆

【最新刊】
比喩の短歌コレクション
1000
日本短歌総研編著
四六判216頁 1540円（税込）



短歌はレトリックの宝庫です。中でも「比喩」は花形で、古今の名歌の多くは「比喩」に満ち溢れています。本書は「比喩」をいかけた短歌1000を選出。比喩の種類別を明示し難解なものは脚注で解説しました。

固有名詞の短歌
コレクション1000
日本短歌総研編著
1430円（税込）

恋の短歌
コレクション1000
日本短歌総研編著
1430円（税込）

形容詞・形容動詞の短歌
コレクション1000 1430円（税込）

短歌用語辞典
増補 新版
日本短歌総研編著
四六上製箱入536頁 4400円（税込）

短歌によく使われる用語の説明と著名歌人の作品を多数引用。他に類書のない実作者必携の辞典。見出し語云〇四・引例歌七三四七首
【ご購入はお近くの書店か直接小社まで。歌集出版も承ります。】

〒112-0002 東京都文京区小石川 5-16-4 図書出版 飯塚書店 TEL 03-3815-3805 FAX 03-3815-3810

島木赤彦研究会人會案内

- 島木赤彦研究会は昭和45年に設立。支部は昭和49年に長野県支部として設立。
- 会長 高橋 克
- 島木赤彦研究会は、近代日本文学および、近代教育における島木赤彦の業績の資料保全と、調査研究を目的としています。
- そのための研究活動として、研究大会の開催・資料展示会・東京例会・支部研究会などを行っています。
- 投稿などの機会が得られます。●（年会費二五〇〇円）本部事務局 江戸川大学 中島金太郎研究室内 〒270-0198 千葉県流山市駒木四七四 ☎ 〇四（七一五二）〇六六一（代表）



作品三

西鶴夢幻

新井光雄 ☆ 東京

西鶴を敢えて読むべし八十路過ぎ今こそ楽しむ動揺もなく
西鶴の「男色大鑑」読んで知るLGBT江戸の常識
古典集五十一巻あるなかに西鶴占めるはなんと三巻
西鶴は文学史上の特異らし庶民の貧しさ初めて活写す
西鶴は万葉以来絶えていた文学のなかに貧しさを書く
西鶴の才能奇才というほかなし一夜で詠んだ俳句二万句
西鶴の世之介なんと故里の寒河江に来ていた友を尋ねて
西鶴は学生時代に読み挫折当然だったか刺激強すぎ

岩村知康 長崎

久しぶりに帰りし郷に親戚の家を訪ぬる午後三時過ぎ
親戚の催ひの餅搗きしたる家われ少年のころの記憶に
郷愁に浸る間もなし田畑の処分の相談済ませるまでは
この当主われより若き世代にて和牛の肥育に精出してをり
わが畑を耕作してゐる当主には感謝の思ひまづ伝へたり
わが畑の処分の相談おもむるに切り出しよいよ本題に入る
「ただで貰ふ訳には」と言ふ母親にわが贈与への同意促す

畑には牧草を植ゑ和牛飼ひ続けゆくべし「贈与」決まりぬ
田と宅地の相談をする旧本家の当主と会ふは午後八時なり

佐々木政子 岩手

本持ちて診察を待てばいつになく読みそめてすぐに名を呼ばれたり
田舎なる駅のベンチに腰を下ろす足元に夕日ほんのり差して
プランターに育つサラダ菜手でちぎり友分けくれぬ暑さ言ひつつ
六階の窓に眺むるみどり田を割りて光れる一筋の川
出づる陽の小高き丘を照らし初め飛び行く鳥を橙に染む
リハビリの効果は目には見えねども続けることが大事と励む
手と足を同時に動かす機器使ひ励みてあれば汗ばみてきぬ
朝霧のやうやく晴れて鳥二羽並び飛びゆく何時も二羽なり

羽田孝輝 山形

つゆほども帰り来ぬとは思はずに通院の兄見送りし朝
兄逝きて受け入れられぬことばかり叶はぬことだけぐるぐる回る
通院せる兄そのまま入院し六日目の朝静かに逝けり
猫だけが残さるる家灯りなく夕暮れの中に鳴き声聞こゆ
茄子胡瓜猛暑続きてみな枯れるゲリラ豪雨よ今すぐに来い
五時七時猛暑続きて引きこもる外で動くは二時間限り
幼な子の無病息災祈りつつ頭を噛みて獅子舞つつく
選挙区に顔も出さずに票くれと虫が良すぎる候補者ありぬ

八月号 十首選

冬雷集 益坂順子

静かなる物言ひにして何事も心得ゐた
る孫に付き行く 櫻井一江
布製のグラブに嬉しさ隠されず駆けま
はりける小五の聖夜 山口嵩
公園にあそぶ子供らかはゆしと齡のふ
けてしばしばおもふ 天野克彦
人の生を見届けきたる経験は在宅介護
の覚悟を後押す 高松美智子 ☆
ためらひの無き動きにて植込みに腹這
ふ蜥蜴ただに素早く 高橋説子
溪谷に射す陽光の柔らかく独りの時間
を静かに見つむ 嶋田正之
用水をひきてめぐらす加治川の水の育
むさみどりの苗 橘美千代
わが海馬やさしき夢を作りおり五月に
逝きたる友を連れ来て

ブレイクあずさ ☆

譲られて座るバス席女生徒の若き温み
の残る窓際 田端五百子
ハウス内に風は生まれず一生を風を知
らずに育つ椰子の木 井上蒼子

八月号 十首選

八月集／残響集 山口嵩

迫りくる五月若葉の萌え立つをわが身
に受けて深山を下る 本間志津子
ブラボーと叫びたくなるかなめもちの
赤美しく続く道行く 梶尾栄子
青森の一人の我が家に戻れば風除室
に飼ふ保護猫の鳴く 東ミチ
山肌の草払いつつ歩みゆく鳥の囀り笹
百合の咲く 藤田夏見 ☆
爪は何故こんなに早く伸びるのか切る
たび思うこの歳になり 川俣美治子 ☆
ぜんまいを茹でて広げる墓座の上夫は
何度も揉みて乾かす 井上鈴子
渡渉より岩場へつづく緊張を三葉躑躅
に癒されてをり 益坂順子
帰宅後の蕩けるやうな感覚に留守居の
夫の「俺も疲れた」 同
文字を打つかわりに声でAIに書かせ
るメール吾がスマホでも 山崎猛 ☆
かけっこが好きな子らから誘われるハ
ンデイをもらってよいスタート
片桐美穂子 ☆

塚 本 節 子 ☆ 茨城

青虫に好かれ過ぎたるブロッコリー葉っぱのこらずレースの様に
母植えし南高梅は巨木なり五本全てに祠のありぬ
母植えし南高梅は大粒にて豊作なり三十キロ收穫す
塩漬けにらつきよう酢漬けすし酢漬け三種に漬けたる梅を干したり
土用まひるま箆に干したる三種の梅裏返しつつ母を想えり
干す梅の一つひとつに顔のありうす紅色のそばかす美人も
初めての女孫のピアノ発表会動画送られ耳凝らし聴く

金 子 八重子 ☆ 千葉

白髪染め念入りにして更新す十年経ったマイナナーカード
うとうとと二十六度の室温と微風の設定これが極楽
アボカドをご飯に乗せて洋風のマグロ丼とすわさび醤油で
次々と本音の飛び出す自治会合薄いコーヒークレームは出ず
焼鳥は横にひっぱり縦に食うジョッキの泡の付いてる口元
頑張り屋の孫の弱音にホロリとしポジティブばかりを褒めて悔やみぬ
一人居は手前の軽い皿ばかり奥の美濃焼出番無くなり
孫からの暑中ハガキのイラストのガリガリ君もとうとう溶けてる

首 藤 文 江 ☆ 埼玉

美声なる女性車掌のアナウンス終点で見る後ろ姿を
七夕の願い事記すそこだけが神聖に見える改札口

八月号 十首選

作 品 一 石渡 静夫

定植のトマトの育ち元気よく青い実の
房ひごと膨らむ 正田フミエ ☆
足指の間に入る洗ひ手の心ゆかしき指
の動きよ 飯塚澄子
意に染まぬ夫変えるは難しく我が変わ
りゆく楽しみ求めて 斉藤トミ子 ☆
絵の出版誘ってくれたが辞退するのんび
り気ままに描きたいだけ浜田はるみ ☆
緑なす雨のさ庭にあじさいの桃色ふた
つひそやかに咲く 田中祐子 ☆
宙に伸ぶる藤づる伝ふ雨粒の落ちてつ
る先驚きて揺る 鈴木やよい
入梅のちかき並木路さはさはと五月の
風吹くみどりとわれに 大塚照美
滝壺の周囲の岩の傾きが見せる大地の
躍動の跡 須藤紀子
「けふはここまでにしようね」と又も
いふ施設の友に掛けたる電話

江藤ひさ子
生協の注文書にて頼む米抽選となりい
つもはづれる 鈴木計子

八月号 十首選

作 品 二 大塚 亮子

玉葱を採りたる畝に三十本芋蔓植える
雨模様の日 児玉孝子 ☆
日替りで十度の気温が上下する今日着
る服に毎朝迷う 卯嶋貴子 ☆
「長生きも大変ながよ」九十五歳のお
みなの言葉が脳裏に浮かぶ

川上美智子 ☆
山桜まだ咲いてゐた山の奥喧噪離れて
孤高の姿 植松千恵子
隣人の施設に入所したる後庭の紫陽花
見頃となりぬ 山本述子
もみぢ狩りの青蓮院の庭園に夕陽ひと
時照りて暮れ行く 大野 茜
今年こそツバメが我が家に来て来た心
待ちしたうれしい初夏なり 谷田律子 ☆
若き日に酒酌み交わししことありき後
輩の死を新聞に見る 藤田英輔 ☆
水無月は母の忌なりて今年また紫陽花
が咲く色とりどりに 小嶋知葉 ☆
茄子苗を植ゑて手袋外すとき指すり抜
ける五月の風が 佐藤幸子

ゴーヤ入れ苦みと辛みしつかりとパンチの効いたカレーを作る
スーパ―はセルフレジになり慣れたればおもしろく楽しバーコードかざす
ラジオより祖父の馴染みの歌聞こゆ「花も嵐も踏み越えて」
出征の式に臨みし祖父の顔言葉飲み込むような口元
願わくは戦知らずに世を去らむ戦後生まれの吾のままで
「にこちゃん」と名前をつければ愛着がさらに増しゆくロボットペット
「にこちゃん」は父にも「おはよ」と声を出し父も笑顔で応える朝よ
越 澤 太 朗 ☆ 茨城
苗木より三年目なりブルーベリー今年は豊作たわなに実りぬ
ブルーベリー手籠に摘んで山に盛る二粒三粒零れ落ちたり
朝採りのキュウリを食べるお茶漬けに何も足さずに味噌のせるだけ
畑の仲間と今年も秋そば栽培す八月八日の種蒔き決めて
小玉スイカゴロゴロ育ち藁被せ子等の楽しみスイカ割り待つ
人参は除草の効果表れて五寸という名のままに育ちぬ
後 藤 恭 介 ☆ 茨城
日々伸びる風船葛と朝顔と天を目指すや庭の垣根に
収録のビデオ見ている午前中短歌と俳句の全国大会
アメリカの発想学ぶ人間ジョンソントウンに活用される店と住宅
宴のあとジャズ喫茶にて思索するこれまでのことこれからのこと

今年また太極拳の暑氣払い妻の送迎はわれが務める
久びきのモーニングに妻と行くコメダは満席で隣のドトール
炎天に参加者十名の短歌会各作品に感想述べる

長谷川 剛 山形

富士山の雪解け水が湧きいづる忍野八海神秘のみづうみ
朝夕に気ままな富士が顔を出す長い裾野を引きずりながら
富士の山フェリーに乗りて見渡せど霞にけぶりほの白く見ゆ
散歩道乾いた土に雨降りて土の匂ひが空を漂ふ

亡き父の思ひを今に書き留むシベリア抑留過酷な日々を
海割れてトンボロめざし象島へ奇怪な生きもの潮だまりに見ゆ
「ひさしづり」旧知と会へど名が出ない元気を確かめその場をとりなす

長澤 千恵子☆ 山形

大沼の森の小道を散策す緑のアーチより木洩れ日注ぐ

大沼の緑の中に戯れる父子を眺む温き思いで

空見れば人工衛星と三日月とたそがれ時にくつきり見ゆる

水不足野菜も花も人間も萎れた姿で涼しさ求む

自分史を送り来る友は短歌をも学び創めて歌送り来る

今野 澄子 山形

木箱には「トンプク風一」の貼紙あり幼き頃の苦き置き葉

愛犬と花を愛でつつ独り住む友の日常に安堵を覚ゆ

八月号 十首選

作品三 天野 克彦

「みだれ髪」に万葉集が詠み込まれ「春
は二重に巻いた帯」とか 新井光雄☆
この夏は土佐へ行きたし室戸岬足摺岬
太平洋へ 立石節子☆

久々に山又山を越えて来て畑作に励む
姉と再会す 高藤朱美☆

大根をグンと引き抜く白じろとかたち
も良くて一級品なり 越澤太朗☆

咲き満ちて風に運ばる花びらのわが
弁当の上にも落ちる 後藤恭介☆

窓の外に今日も来ぬかと雉を待つ木々
の緑を眺めながら 今福崎子☆

強風にネットに確としがみつくり
の苗の細き巻きひげ 長谷川 剛

朝採りのアスパラガスとさくらんぼ二
人暮らしの一皿となる 河原木光子☆

疎開した我生きのびて原爆忌に八十路
をすぎて健やかに居る 猿渡憲子☆

望み抱く想いは熱くころにはウルマ
ンの詩「青春」薫る 松田忠一☆

歌集/歌書 御礼

編集室・佐藤靖子

■勝川桂子歌集

『老いを生きある』

令和七年六月八日発行の第三歌集で
四八二首を収めている。今回は米寿を
記念しての出版であり、八十代で生き
ることの大変さ、特に体の老化を感じ
つつ何とか静かに乗り越えて生きよう
という姿勢が頼もしい歌集である。
草木や花を見れば心が和むという今
は良い境涯に思える。

パンマツリの鉢にいつしらムスカ
リと振花の咲きペランダに春
ルリマツリ、ジュランタ何れも青
き花零れて描く水の流れを

花と共に生きある日々の楽しさよ
明日は菊の花も咲くらむ

だれにでも来る老い。友の老もひと
ごとでなく。

文明の進化を拒むわが身なるかア
レルギー反応いくつも出で来
スキーブーツのやうなギプスで三ヶ
月は耐へ難きかな老いたる身には
手術せぬと決まれば心の軽くなり

三時草猛暑に耐へて咲くを待つ時刻を告ぐる花の健気さ
古里は人影も無く廃墟となり川の轟音胸に響きぬ
早朝の鳥の囀り蝉の音も失せたるほどの灼熱の日日
姥百合の密かに咲くを訪ぬれば何処に消えたか淡緑の花

児 珠 純子 山形

甥の名で届く法要案内文弟逝きし暑き夏来る

退職金充てて建てたるこの墓にふた年もなく入る弟

早かりし父は五十九弟六十二今日は二人の年回供養

祖父の顔遺影写真でしか知らぬ三十二歳の甥施主となる

姪の娘は産まれて三月初めての読経の声に少し泣きをり

三歳の男の子と赤子のかわいさに時折り義妹に笑顔の見ゆる

墓参り終りてひとり残りみて追善供養の詠歌唱ふる

剣道五段居合道六段の弟にわれも習ひて己を磨かむ

和 田 妙子 山形

半世紀交流続く千葉の友変はらず届く落花生うれし

建ちてより四十年のわが家に季節の花の途切れず咲きぬ

遅咲きも早咲きもある花々に喝采送る猛暑の日々に

朝早くウグイスの声聞こえをり猛暑の中でと不思議に思ふ

常ならば外出いとふ雨の日も今年はうれし傘さして行く

亡き父の習慣とせし朝刊を我もひらきて一日始まる

(☆印は新仮名遣い希望者です)

水中歩行に笑顔の漏るる

寂しさを言ひしばかりに施設への入居となりし友の戸惑ひ
怒り。

一方的に攻め入るロシアの利己主義に平和と乱さる世界と怒れ

国葬に値するかも審議せぬ首相よ聞く耳失ひましたか

繋がり。

吾がみずとも兄弟、いとこの良き絆繋がりゆくを願ふこの頃

祖母の繰りし糸をば母が織り上げて私が仕立てた一着愛ほし

(雲珠叢書五十篇 ながらみ書房刊)

■取達克子歌集『われの賜物』

令和七年六月十四日発行、四二六首の第二歌集。著者の姓は、とりちがい、と読む。その発祥を知るのも楽しみである。第一歌集は福岡市文学賞を受賞している。

夫、子、孫みな医師の、安らかなしかも老いに向かう日日に、欠かせない若い身内のエネルギー、それこそが著者にとって賜物として有難く生活している様子が感じられる。「短歌人」同人。

医家ゆえに。

患者診る白衣姿の娘の様をはじめて見た
りテレビの画面に

死の願望者のごろ多しと休日と呼ばれ
出でゆく精神科医夫

両親は医療スタッフ突然のコロナ休校に
梨香子をあづかる

映像が読み手に広がっていくような歌。

赤蟻のしづかな行列 空き瓶の底に微量
のマンゴージュース

夏火火ひろがり消ゆる華やきをおぼるな
る月が見下ろしてゐる

櫛田神社祇園山笠境内の鳩はいつもの居
場所を失ふ

動物園開園を待つ子供らの列をみだして
アキアカネ飛ぶ

雨あとの草抜く庭に団子虫せみの穴へと
入り込みたり

著者の母。

歌会に和服で出かけし母なりき みまか
りて早三年を過ぎぬ

(六花書林刊)

■堀井弥生歌集『しらさぎ』

令和七年六月二十日発行、三三七首の第二歌集。一時中断していた著者の復帰には力強い励ましがあり、その後、厚生労働大臣賞を受けたのが次の歌である。

糠雨に暮れゆく夕べ二人目を産む躊躇ひ
を娘の言へり

日日は季節と共に。

寒中の海より届く新海苔の豊かなる香を

白飯に置く

城近き名古屋の街に変はるもの変はらざるもの若葉風吹く

園児らの去りてみ寺の子地藏に団栗の並む落葉を皿に

プーサンの傘回しつづ歩む児の高さに開く青き紫陽花

世の中のこと。

「真珠湾は伊勢にあるの」真顔にて問ふ
若者にわが振り返る

どうしても比べてしまふ宰相と将棋少年
その佇まひ

先師松村英一、千代國一への敬愛がよく伝わる。

浮草のやうなる住まひの本棚に据うる英
一國一歌集

わる。

枝豆を「妻食ひ尽す」と國一の結びの写
実笑ひ自づと

旅先で。結句により伝わり方が膨らんだ。
旅先の朝に開く地方紙に短歌欄あり珈琲
旨し

(国民文学叢書第六一六篇 短歌研究社刊)



編集 後記

▽八月号に飯塚書店の『比喩の短歌コレクション1000』の広告が載っていたので早速読んでみた。「『のような』などの直喩やいわゆる擬人法の活喩は毎月の冬雷誌にも見られる。あとはどんな種類の比喩があるのか、例を挙げて紹介を書かせていただいた。本書には大山敏夫氏の歌集作品も六首掲載されている。古今の短歌一〇〇〇首に出会い学べる一冊である。

▽大山氏の評論は「ひばり論」に移った。その中で邦楽について詳しく述べている箇所がある。都々逸、端唄などの七音五音が連なる歌詞は調べがよく、どこか短歌に通ずるものがあると思った。次回以降の論が楽しみである。

▽ほどなく第六十四回大会が開催される。心を合わせて良い一日にしましょう。
(桜井美保子)

▽気温35度超えの猛暑日はもはや当たり前となった。40度超えも今年あちこちの地で観測された。誌面には酷暑を詠んだ歌の多い中、エアコンなしで扇風機の風で過ごすという青木さんの歌が衝撃的だった。『無事で良かった。実家の母がエアコンを使っているか日に何度も確認している。万一エアコンが故障しても設置不要のエアコンが販売されている。四季折々の温帯日本はどこに。』

▽大会詠草のコピーを四百枚されたと小林先生の歌。その4枚が今私たちの手元に。(橘 美千代)
▽第64回冬雷大会の案内を本欄の下段に設けました。十月十二日です。一緒に盛り上げましょう。よろしく願います。係の手違いから急遽追加詠草の葉書を回しました。ご理解賜りご協力をお願いします。
(天山敏夫)

▽年に一度顔を合わせてゆつくりと語ることが出来る冬雷大会は大きな楽しみになっている。遠くか

ら来られる方もあるので今年も三連休に合せてみたけれどご参加頂けるのかドキドキである。いつも通りの作業で大会の歌を皆様に発送したのだがメールで送って下さった方の歌を落してしまった。原因は私が直ぐにプリントしておかなかったことで、幸い選歌締切に間があつたので直ぐに訂正とお願いの葉書は出せたのだけれど大きなミスでした。作者と皆様に深くお詫びを申し上げます。

▽八月も数日で終わろうとしているのに猛暑が治まる気配がなく私の住む所には雨も降らない。こんなことを言うと集中豪雨に苦しんで居られる方々に叱られそうだが空を見上げて溜息をつくことが多い。こうした気象が人の心にも反映するのが昨日首都高速で走行中の白い車をバイクの人が足で何度も蹴っている所を見た。走りながらのことで渋滞はしていないが少し混んでいたのを息を呑んだ。蹴った後にバイクは走り去って

行つたがこの夏の異常な暑さで人の心も荒くなっているのかもしれない。

▽目次上に「創展」の案内が載っている。この葉書を戴くと秋が近づいたという気持ちになる。銀杏が鈴生りに生っているのを見上げ乍ら広い上野公園を歩くのも楽しい。今年も絵を見に行くことを楽しみに暑さのなかで頑張りたい。

▽御寄附御礼申し上げます。
井上菅子 (小林芳枝)

第64回 冬雷大会

10月12日(日) 午前10時開催

■出詠作品批評・・・大山敏夫・

小林芳枝・桜井美保子

■作品批評進行・・・橘 美千代

ホテルルートイン東京・東陽町

☎ 03-3649-1211

編集後記

《冬雷規定・掲載用》

- 一、本会は冬雷短歌会と称し昭和三十七年四月一日創立した。(代表は大山敏夫)
- 一、事務局は「東京都葛飾区白鳥四の十五の九の四〇九 小林方」に置き、責任者小林芳枝とする。(事務局は副代表を兼務)
- 一、短歌を通して会員相互の親睦を深め、短歌の道の向上をはかると共に地域社会の文化の発展に寄与する事を目的とする。
- 一、会費を納入すれば誰でも会員になれる。
- 一、長年選者等を務め著しい功績のある会員を名誉会員とする事がある。
- 一、会員は本会主催の諸会合に参加出来る。
- 一、月刊誌「冬雷」を発行する。会員は「冬雷」に作品および文章を投稿できる。ただし取捨は編集部一任とする。「冬雷」の発行所を「川越市藤間五四〇の二の二〇七 大山方」とする。
- 一、編集委員若干名を選出して、合議によって「冬雷」の制作や会の運営に当る。
- 一、会費は年額(購読料を含む)次の通りとし、六か月以上前納とする。ただし途中退会された場合の会費は返金しない。
*会費は原則として振替にて納入する事。
A 作品三欄所属会員 一四〇〇〇円
B 作品二欄所属会員 一七〇〇〇円
C 作品一欄所属会員 二〇〇〇〇円
D 維持会員(二部購入) 二六〇〇〇円
E 購読会員 八〇〇〇円
- 一、この会則は、二〇二〇年一月一日より執行する。

《投稿規定》

- 一、投稿は月一回未発表9首まで投稿できる。原稿用紙はB5判二百字詰めタテ型を使用し、何月号、所属作品欄を明記して各作品欄担当選者宛に直送する。原稿用紙が二枚以上になる時は右肩を綴じる。締切りは十五日、発表は翌々月号。担当選者は原則として左記。
冬雷集・作品三欄(メール投稿分)
作品一欄 ・担当 大山 敏夫
作品二欄・作品三欄(手書き投稿分) ・担当 桜井美保子
・担当 小林 芳枝
一、表記は自由とするが、新仮名希望者は氏名の下に☆印を記入する。
一、無料で添削に応じる。一通を返信用として必ず同じ歌稿を二通、及び返信先を表記した封筒に切手を貼り同封する。一週間以内に戻すことに努めている。添削は入会後五年程度を目処とする。
《Eメールでの投稿案内》
白地に一首ずつベタ打ちにして、行間も空けないこと。頭を一字分空けたり、一首を二行に分断したり、余分な番号を付けたたり、色を付けたりしないこと。分量の少ない場合は通常のメール本文、又はケータイ・スマホでも送信可能。
Eメールによる投稿は左記で対応する。
大山 敏夫 tourai-ooiyama@nifty.com
小林 芳枝 kysie@nifty.com
桜井美保子 mhoko496@s4.dion.ne.jp

《選者住所》 大山 敏夫 350-1142 川越市藤間 540-2-207 ☎ 090-2565-2263

小林 芳枝 125-0063 葛飾区白鳥 4-15-9-409 ☎ 03-3604-3655

桜井美保子 235-0022 横浜市磯子区汐見台 2-2-2-608 ☎ 090-6029-0590

2025年10月1日発行

編集発行人 大山 敏夫

データ制作 冬雷編集室

印刷・製本 (株) ローヤル企画

発行所 冬雷短歌会

350-1142 川越市藤間 540-2-207

電話 090-2565-2263

事務局 125-0063 葛飾区白鳥 4-15-9-409

振替 00140-8-92027

ホームページ <http://www.tourai.jp>

頒 価 700 円